

平成9年度県営農村総合整備上市西部地区に伴う

富山県上市町

江上A遺跡発掘調査概報

1998年3月

上市町教育委員会

平成 9 年度県営農村総合整備上市西部地区に伴う

富山県上市町

江上 A 遺跡発掘調査概報

1998年 3月

上市町教育委員会

序

上市町江上A遺跡は、昭和55年度に行われた北陸自動車道建設に伴う発掘調査で確認された遺跡です。平成8年度にこの地区的農業環境整備の一環として農道の改良事業が計画され、遺跡の一部分が計画地に係ることになりました。上市町教育委員会では、それを受け平成9年度に事前の発掘調査を実施いたしました。

遺跡の範囲は、約20,000m²でしたが、調査は、農道改良部分に限定して実施したため遺跡の大部分は保存することができました。

発掘調査では弥生時代後期の遺構・遺物をはじめ中近世の溝・暗渠跡も検出され、長い期間にわたって人々の生活がこの地に営まれていたことを示してくれました。特に弥生時代後期では、水害によって流し出された遺物が、散乱している状態で検出され、自然の中で堪え忍び、その恩恵を受けた当時の人々の生活をかいま見ることができます。また鮮やかに赤彩された高杯・壺の一部も検出され当時この付近に祭祀を伴う営みがあったことが明らかとなりました。

調査は、平成9年の6月から8月に実施しましたが、この間に掘り出された資料が上市町及び富山県の歴史を物語るよですがとなれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり多大なご協力をいただきました富山県農地林務部・富山県富山農地林務事務所地元江上地区・青出新地区のみなさまに心より感謝申し上げます。

平成10年3月

上市町教育委員会

例　　言

- 1 本書は富山県上市町江上・青出新地内に所在する江上A遺跡の発掘調査報告である。
- 2 調査は平成9年6月1日から同年7月31日までの延べ42日間で実施した。
- 3 遺跡は約20,000m²の規模を持つが、調査面積は680m²である。
- 4 調査は上市町教育委員会が、富山県富山農地林務事務所の委託を受け実施したが、農業関連事業であるところから農家負担分については、上市町教育委員会が国庫補助金・県費補助金を受け負担し、実施した。
- 5 調査事務局は、上市町教育委員会にあり、調査期間中、文化庁記念物課、富山県教育委員会（文化課・県郷蔵文化財センター）の指導を受けた。事務及び調査担当は、生涯学習課文化振興係係長高慶孝・同嘱託芳賀万里子が担当し、生涯学習課長山口哲夫が総括した。
- 6 遺物の整理、本書の編集・執筆は、調査担当が行ったが、遺物の実測・トレスは調査担当が中心となり後述する富山大学大学院生・同学生が行った。
- 7 調査期間中及び本書の作成にあたり、下記の方々から有意義な指導・助言並びにご協力を頂いた。記して深甚なる謝意としたい。
富山大学人文学部教授 宇野隆夫 富山市教育委員会生涯学習課主幹 藤田富士夫 富山県埋蔵文化財センター主任 斎藤 隆、久々忠義、橋本正春 魚津市教育委員会社会教育課主任 麻柄一志、立山町教育委員会社会教育課主任 三鍋秀典、同嘱託 新本真之、中島義人（順不同・敬称略）
- 8 調査参加者はつぎのとおりである。

山崎雅恵（以上富山大学大学院）金成淳一、野水晃子、戸簞暢宏、早川さやか（以上富山大学学生）荒木智恵子、生駒小夜子、若木啓子、伊東藤一、岩城ハツイ、金子道子、金子みつゑ、川上富美子、黒田キク、桑名マツエ、城木文子、高城英子、高城富美子、高城準子、竹林昭夫、田中フミ子、田中好巳、中村スミ子、中川セツ、中川洋子、西川文一、平井文子、牧野ヨシキ、三輪光子、森田礼子、吉田久美子、吉田盛太郎、若山初枝（以上作業員）山崎雅恵（整理作業員富山大学大学院）金成淳一、戸簞暢宏、中島和哉、中野秀昭、早川さやか（整理作業員富山大学学生）其内みき子、塩田和子、酒井哲也（整理作業員）

目 次

序 文

例 言

I 遺跡の環境	1
第1図 地形と周辺の遺跡	2
II 調査に至る経過	3
III 調査の経過と層序	3
第2図 地形と区割図	4
IV 調査結果	5
1. 遺構	5
2. 遺物	6
V まとめ	11

引用・参考文献

第3図 遺構実測図	図版7 遺物実測図	図版17 遺物写真
第4図 遺構実測図	図版8 遺物実測図	図版18 遺物写真
第5図 遺構実測図	図版9 遺構写真	図版19 遺物写真
図 版	図版10 遺構写真	図版20 遺物写真
図版1 江上A遺跡周辺航空写真	図版11 遺構写真	図版21 遺物写真
図版2 遺物実測図	図版12 遺構写真	図版22 遺物写真
図版3 遺物実測図	図版13 遺構写真	図版23 遺物写真
図版4 遺物実測図	図版14 遺構写真	図版24 遺物写真
図版5 遺物実測図	図版15 遺物写真	
図版6 遺物実測図	図版16 遺物写真	

I 遺跡の環境

江上A遺跡は、富山県中新川郡上市町江上地内に所在する（第1図・第2図）。上市町は、富山県の中央県都である富山市の東に位置し、北を滑川市、南を立山町に接する。

町の東部は、鷲岳（標高2998m）をはじめとする北アルプス立山連峰がそびえる。町の西部は、上市川・白岩川・郷川により形作られた複合扇状地で、緑の田園地帯を形成している。もっとも標高の高い鷲岳山頂とともに低い平野部での比高差は、直線距離約20kmで2,980mであり、かなり急峻な地形といえる。しかしながら90%以上の遺跡が集中する平野部は、標高50m以下の部分であり、現在も住民の大多数がここに集住する。

遺跡は、町の中心街の北西にあり、上市川と白岩川によって形成された扇状地に位置する。遺跡は、この沖積平野の標高15m～16mの平野に占地する。

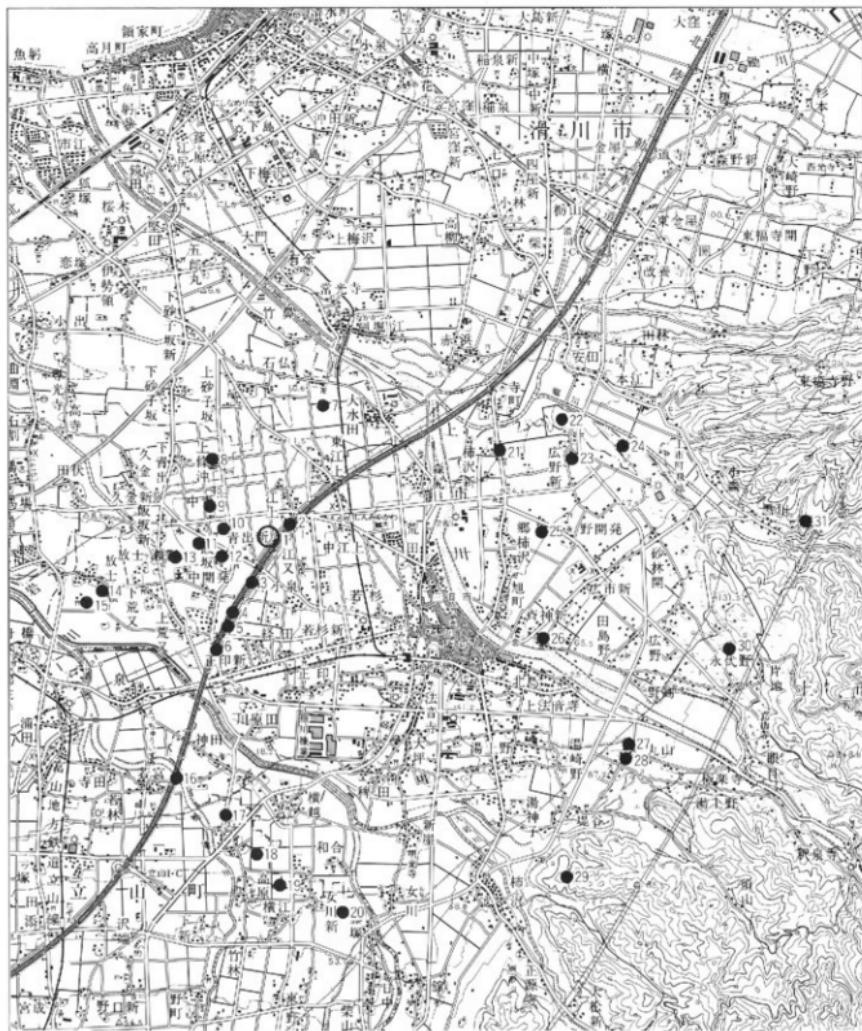
この平野部は、弥生時代以降、低地は農業用地、やや高い地域は、邑落が営まれ連續として人々の活動の場となってきた。富山平野は庄川・神通川・常願寺川・早月川・黒部川などの大河川が氾濫を繰り返し、人々の営みを犯してきたが、中新川郡のこの地域にあっては、河川が比較的小規模で、水害の歴史はあっても人々が住めなくなることはなく、県内でも安定した地域であったことから遺跡も数多く残存する。本遺跡はその中でも非常によい残存状況を示す本県弥生時代の代表的な遺跡の一つである。

遺跡は昭和55年に行われた北陸自動車道建設工事の際発見され、調査された。調査区は、今回の調査区の北東200mの地区で、建物跡は、3棟程度と少ないが、遺物は、土器50,000点、石器2,000点、木製品55,00点と大量の遺物を出土している。特に水害に遭ったことで大量の木製品を出土したが、ここでこの遺跡が全国的にも注目される遺跡となった。木製品は、鍵・鏃・臼・杵・火つき臼・火つき杵・柄杓・矢羽・高床倉庫の部材・橋など当時の生活全般にわたる遺物が出上り、当時の生活の様子そのまま物語る遺跡となった。しかしながら調査が道路敷きに限定されていたことで水田遺構などは検出されなかつた。今回の調査区では、水田遺構などが、期待されたが、水害の影響からか、その痕跡は確認されなかつた。

周辺には、北陸自動車道沿線に東江上遺跡、江上B遺跡、飯坂遺跡、中小泉遺跡、正印新遺跡がある。これらの遺跡は、弥生時代の住居の他、土墳墓や水利施設の痕跡を残しており、江上A遺跡を含め3km以内の距離にある。これらは、有機的なつながりを持つ同時代の遺跡と考えられた。それから弥生時代後期のこの付近の集落は2～3棟程度の住居跡から構成されそれらがつながりを持って営まれていた、ちょうど散居村のような景観であったものと考えられている。

このほか、弥生時代の遺跡をみると大永田遺跡、下青出遺跡、中青出遺跡、中青出南遺跡、中開発北遺跡、飯坂北遺跡、相ノ木北遺跡、放士ヶ瀬西・南の両遺跡などが、上市川と白岩川の両河川の間の平野部に点在しており、この地域が、弥生時代以降飛躍的に人々の営みが増大し、土地利用が進んだことを物語っている。こうした遺跡はさらに南西の立山町域にも伸びており、若宮B遺跡、辻遺跡、辻宮下遺跡、高原源訪遺跡、下女川遺跡の各遺跡が所在し、中新川平野のすべてにその広がりが確認される。これらの遺跡は、古墳時代、奈良・平安時代までその周辺に場所を移しながらも連續として続き、中近世を経て今日まで至っている。

富山県の特に東部地域の発掘調査をみると昭和55年以前、沖積平野では遺跡の数が極端に少なく、大河川の氾濫原であったことから、人々の居住に適さなかった地域と考えられてきた。しかしながら、昭和55年の江上A遺跡の調査を境に県内各地で沖積平野での大遺跡の発見が相次いだ。中新川郡内だけでも百数十の遺跡が発掘調査や分布調査で確認されている。その意味で江上遺跡は、発掘調査の歴史の中でもエポックとなる調査であった。その追認となった本遺跡の調査は、本地域の弥生時代の自然との関わりを探る例といえよう。



第1図 地形と周辺の遺跡 (1/50,000)

1. 江上A遺跡、2. 江上B遺跡、3. 飯坂遺跡、4. 中小泉遺跡、5. 下経田遺跡、6. 正印新造跡、7. 大永田遺跡、
 8. 下青出遺跡、9. 中青出遺跡、10. 中青出南遺跡、11. 中間発北遺跡、12. 坂城北遺跡、13. 相ノ木北遺跡、
 14. 放土ヶ瀬西遺跡、15. 放土ヶ瀬南道路、16. 若宮B遺跡、17. た遣跡、18. 宮下遣跡、19. 高原原派訪遺跡、20. 下女川遺跡、
 21. 柿沢新造跡、22. 本江野庄新造跡、23. 広野新南遺跡、24. 砂呑聞北I遺跡、25. 黒柿沢遺跡、26. 斎神新古墳群、
 27. 丸山A遺跡、28. 丸山E遺跡、29. 柿沢古墳群、30. 水代ホ遺跡、31. 黒川古墳

Ⅱ 調査に至る経過

上市町江上・青出新地内には、平成8年度から、県営農村総合整備事業上市西部地区の一環として農道改良事業が計画され、平成9年度に事業が実施されることになった。しかしながら同地内には、江上A遺跡の存在が知られており、地元江上・青出新地区、富山県富山農地林務事務所、上市町教育委員会、富山県教育委員会の4者により、遺跡の保護と工事計画の調整を図るための事前協議が催された。

協議では、まず道路計画の洗い出しを行い掘削を受ける部分と現在の水田面まで達しない部分の割り出しを行い、遺跡範囲との照合を行った。その結果、道路改良される路線中、約1,000m²を調査対象としそのうち600m²（幅員5m、全長1200m）にわたる本調査・400m²を対象とした試掘調査が必要となった。

これにより、発掘調査は、平成9年の耕作の関係から田植えが終了する5月末から行い、農道改良工事は、8月から実施する事で4者が合意した。

調査費用は、富山県農地林務部が、上市町教育委員会に委託して実施する事としたが、農業関連事業であるところから、農家負担分については、上市町教育委員会が、国庫補助金・県費補助金をえて負担することとなった。

Ⅲ 調査の経過と層序

本 調 査

平成9年6月1日から同年7月31日までの延べ42日間で実施した。調査は、農道改良事業予定地内600m²を対象に遺構・遺物の確認調査を実施した。

その結果、水害により擾乱を受けた部分があるものの、土壤・穴・溝などが確認され遺物も整理箱30箱程度で、比較的よい残存状況を示した。

出土した弥生時代の遺物は、水害により流し出されたもので、調査区に散乱する状態で検出された。遺物の摩耗から考えて付近に住居が存在することが推定された。その水害を受けた面の上面では、中近世の溝・暗渠などの遺構が確認された。地表面から弥生時代の面までは約80cm、中近世までは、約50cmであり、後世のは場整備による土砂の搬入を考えても過去に数回この地域に大きな水害があったことが確認された。

なお、調査は上市町が富山県農地林務部の委託を受けて実施したが、地元負担金については上市町教育委員会が、国庫補助金・県費補助金を得て実施した。

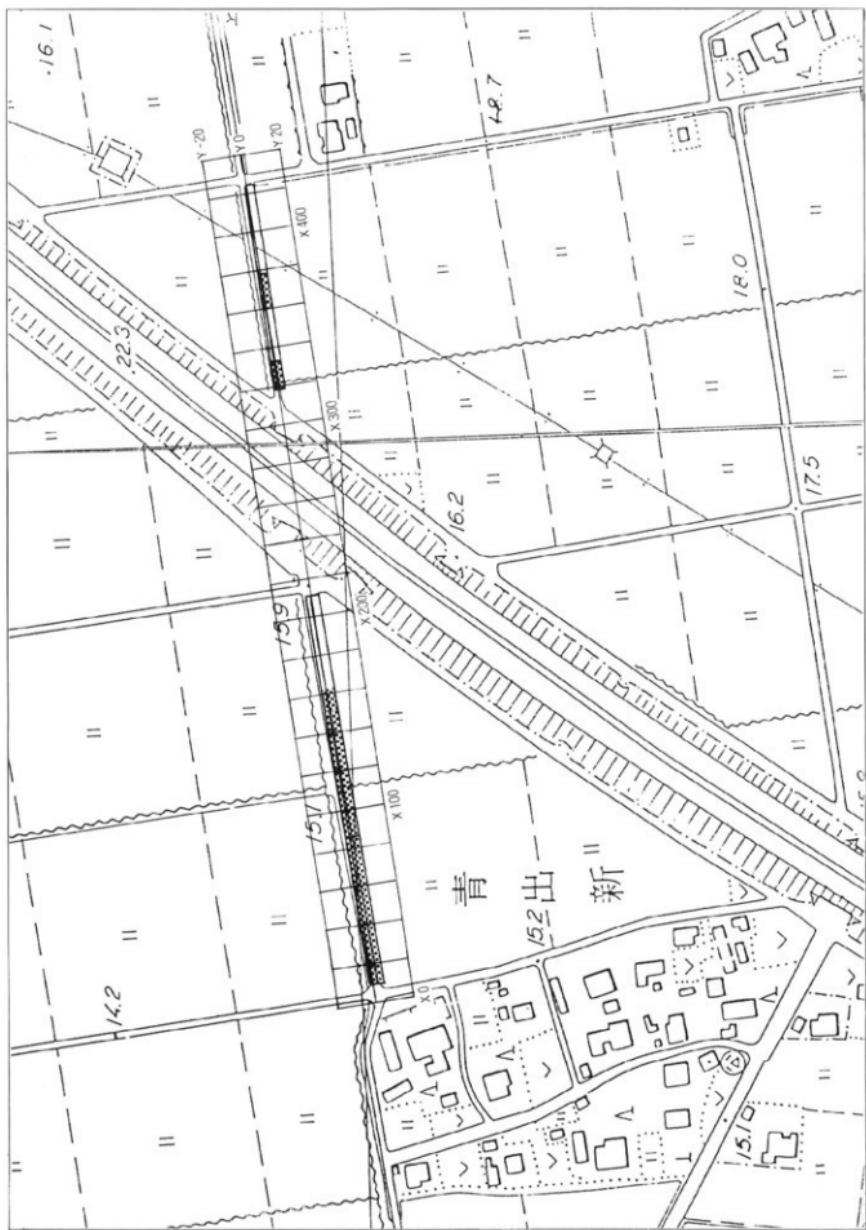
試掘調査

平成9年7月28日から同年7月29日までの延べ2日間で実施した。調査範囲1,000m²の内遺跡隣にあたる約80m²の遺構・遺物の残存状況を確認した。

その結果、遺構・遺物は検出されなかった。しかしながら、平成8年度に調査した農道拡幅に伴う江上B遺跡の調査で天王山式の土器を伴う溝が検出されているところから今後も調査の対象とするべきものと考える。

層 序

層序は、第1層耕作土層（10~30cm）・第2層灰褐色土層（約20cm）・第3層黒褐色土層（10~20cm）・第4層黄灰砂層・第5層黄色土層となっている。このうち4層が水害による堆積層で4・5（地山）の直上で弥生時代の遺構を確認した。



第2図 地形と区割図 (1/2,500)
(座標は国上坐標に平行である)

IV 調査成果

1. 遺構 (第3～5図、図版9～14)

遺構は第②層・第③層と第4層・第5層上面で検出されたが、いずれの面も密度はまばらである。なお、第②層・第③層は第4層黄灰色砂（水害による堆積層）より上位の層である。（第4図参照）検出した遺構は第②・③層上面で穴25基、土坑6基、溝3条、第4層上面で溝1条、第5層上面で穴13基、土坑3基、溝8条である。なお便宜上長径1mほどのものを土坑として扱ったが、いずれも浅く遺物が検出されたものも少なかったため、以下記述していない。その他特記事項として、調査区東端に遺物の集中が見られる。以下、図版ごとに詳細を記述する。

遺物集中地点 (第3～4図、図版11-2, 12-4・6)

X10～31、Y-4～1に位置する。第5層上面に弥生土器の集中する地点があり、遺物は南西から北東へ広がるように存在している。またこれらの遺物は、隣接するもので復元可能なものはなく、各々別個体である可能性が高い。このため、これら遺物は水害により流れ込んだものと推測した。

穴 (第3～5図、図版9・11～13)

穴は第②・③層上面で25基、第5層上面で13基検出された。穴の分布は第5層でX75～85・Y-3～1、X124～132・Y-3～1付近に比較的多く見られた。第②・③層の上面では調査区の西側に向かうほど、遺構の密度は高い傾向にある。穴は径約15cmから50cmまでのものが見られた。また遺物の流れ込みが確認されたX25・Y0では、SP25から遺物がまとまって検出された。以下にSP25について記述する。

SP25 (第3～4図、図版12-3) X25、Y0に位置する。長径56cm、短径40cmで平面形は不整円形である。覆土は暗黄灰色土である。この遺構からは遺物がまとまって検出された。遺物は壺口縁部、体部、底部、高坏部などである。このうち高坏は赤彩が施されている。遺物から弥生時代後期の遺構と考えられる。

溝 (第3～5図、図版9～13)

溝は第②・③層で3条、第4層で1条、第5層で8条検出された。このうち3条は中近世以降の溝・暗渠と考えられる。以下、第②・③層で確認されたSD1・SD2・SD3、第4層で確認されたSD4、第5層で検出されたSD5・SD7・SD8・SD9・SD13について述べる。

SD1 (図版9-1) 第③層上面、X13～14、Y-4～1で検出した。南北方向にのびる溝である。検出した部分で長さ約4.7m、最大幅約0.5m、深さ約10cmを測る。断面形は下場の方がわずかに狭い台形を描く。覆土は黒褐色土である。

SD2 (図版9-2) 第③層上面、X18～20、Y-4～1で検出した。南北にのびる溝である。検出した部分で長さ4.6m、最大幅1.4m、深さ約30cmである。断面形は下場の方が狭い台形である。覆土は黒褐色土である。木片が多数検出された。

SD3 (図版9-3) 第②層上面、X21、Y-4～1で検出した。南北にのび、SD2と平行する。検出した部分で長さ約4.7m、最大幅約0.9m、深さ約20cm、断面形は下場の方がわずかに狭い台形で、覆土は黒褐色土である。

SD4 (図版9-5) 第4層上面、X44、Y-3～1で検出した。南北にのびる。検出した部分で長さ約4.7m、最大幅約0.7m、深さ16cmを測り、断面形は浅いU字形である。覆土は黒褐色土である。

SD5 (図版10-2) 第5層上面、X76、Y-3～1で検出した。南北にのびる。検出した部分で長さ約4.4m、最大幅約0.5m、深さ約16cmである。断面形は浅いU字形である。覆土は黒褐色土である。

SD7 (第3～4図、図版11-3・4) 第5層上面、X25～27、Y-3～1で検出した。南北方向にのびる溝である。

検出した部分で長さ4.8m、最大幅約0.5mである。断面形は下場の方がわずかに狭い台形である。覆土は暗黄灰色土である。本遺構からは弥生土器破片を多数検出した。遺物から時期は弥生時代後期と考えられる。

SD8（第3・5図、図版12-1）第5層上面、X39~40、Y-3~1で検出した。南北方向に長い溝であるが、北西にカーブする。検出した部分で長さ4.7m、最大幅約0.4m、深さ16cmである。断面形は下場の方がわずかに狭い台形である。覆土は暗黄灰色土である。層位から弥生時代後期に属するものと考える。

SD9（第3・4図、図版12-2）第5層上面、X57~60、Y-3~1で検出した。南東一北西にのびる溝である。検出した部分で長さ5.2m、最大幅1.1mである。南西に向かって浅くなる。溝の底部は起伏がある。覆土は灰色砂である。弥生時代後期の土器を検出している。

SD13（第3・5図、図版13-3・6）第5層上面、X132~135、Y-3~2で検出した。南東一北西にのびる。検出した部分で長さ4.4m、最大幅約0.7m、深さ約12cmである。断面形は下場の方がわずかに狭い台形である。覆土は黄灰色土である。SD13の肩から東北地方弥生時代中期に編年されている天王山式系統の上器が検出された。他にもSD13周辺の遺構面からは天王山式系統と考えられる破片を3片検出している。

2. 遺 物

出土遺物は、弥生土器・越中瀬戸・土師質皿などである。弥生時代の遺物は、ほとんどが包含層からの出土であり破片資料である。越中瀬戸・土師質皿などの中世以降の遺物の出土はわずかである。以下、図版ごとに特徴を述べる。

弥生土器（図版2~8・図版15~24） 図版2の1~10はSP25から出土した。1~7は壺の口縁部で、いずれも口縁部内側に段を持ち立ち上がる複合口縁を有する。1は口径16cmで、口縁部にはヨコナデを施す。灰黄色を基し、外面に炭化物が付着する。2・3は口径20cmで、口縁部にヨコナデを施す。口縁部のアゴに連続した刻みをもつ。4は口径23cmである。口縁部は3条の平行沈線をめぐらす。5は口径15cmである。口縁は内外面ヨコナデ、体部は外面ハケメ、内面ヘラケズリとハケメを施す。体部上半に横状具で刺突を施す。外面に炭化物が付着する。6は口径16cmである。口縁部に強くヨコナデを施し、口唇部をわずかに上方へ引き出している。体部は内外面ハケメを施す。7は口径19cmである。直立した口縁部に3条の平行沈線をめぐらす。体部外面ハケメ、内面ヘラケズリを施す。体部上半に横状具で連続刺突を行う。外面に炭化物が付着する。8・9は壺の底部破片である。8は底径3.5cm、9は底径4.8cmである。9は内面に炭化物が付着している。10は高壺の坏部である。坏部の中位で屈曲し、口縁部は外反する。口縁端部は平坦である。内外面ミガキ調装を行ない、赤彩が施される。この他赤彩が施された破片は図版15に掲載した。いずれも弥生時代後期に属する遺物である。11はSP11からの出土である。壺の体部破片であり、外面ハケメを施す。外面に炭化物が付着する。12・13は包含層からの出土である。12は壺の口縁部である。幅広の複合口縁をなし、内外面赤彩を施す。13も12と同様な壺の頸部であると考えられ、内外面赤彩を施す。12・13は弥生時代後期後に属するものと考えられる。14~29はSD7からの出土である。14~16・19・22は壺の口縁である。14は長頸壺の口頭部であり、わずかに外傾する。口径9cmである。15は口縁部が直立して立ちあがるもので、口径16cmを測る。内外面ヨコナデを行う。16・19はいずれも複合口縁をなし、口径18cmである。摩耗のため調整は不明である。22は口径20cmである。複合口縁をなし、内外面ヨコナデを行う。17・18・20・21・23~25は壺の口縁部である。いずれも幅の狭い複合口縁を形成する。17は口縁部のアゴの部分が丸みをもちヨコナデを施す。口径は14.6cmである。18は口径17cmである。内外面ヨコナデを施す。20は口縁部が直立して立ち上がり、口唇部を平坦におさめる。口径12cmである。口縁部に連続した刺突を施す。21は口縁部の立ち上がりが特に幅が狭く、口径は11cmである。23は口径12.2cmである。口縁部が直立して立ち上がり、3条の平行沈線を施す。外面に炭化物が付着する。24は口径18cmである。内外

面ともに摩滅している。25は口径18cmである。口縁が直立して立ち上がり、3条の沈線を施す。体部内面はヘラケズリを施す。いずれも弥生時代後期に属する遺物である。26はくの字口縁の壺である。口縁部はゆるく外反する。口径は21cmである。内外面ヨコナデを行い、外面に炭化物が付着する。27は壺の体部破片である。内面はヘラケズリを施す。外面は摩耗が著しい。28は壺の体部破片である。内外面ハケ調整を施し、外面に炭化物が付着する。29は高坏の口縁部である。口径は21.2cmである。

図版3の1～15・18はSD7からの出土である。1～3は壺の体部破片である。外面にハケメを施し、炭化物が付着する。4は台の付く器形の底部である。5・6・7は壺の底部である。いずれも底部中央に凹部を有する。5は底径3.6cmである。内外面炭化物が付着する。6は底径3.8cmで、内面にハケメを有する。内外面炭化物が付着する。7は底径3.4cmである。外面にハケメを有し、内外面炭化物が付着する。13は高坏の坏部である。坏部が中位で屈曲して口縁部が外反するものである。口径は28cmである。内面はナデを施し、外面はハケメを施した後にミガキを行っている。10・14・15は高坏の脚部である。10は外面にミガキを施す。14は脚端部径18cmである。ハの字状に開き、透かし孔をもつ。内面にハケメ、外面にミガキを施す。外面に赤彩を施す。15は脚端部に粘土帯が張り付けられている。脚端部径は25cmである。8・9・12は器台の口縁部である。いずれも口唇部が面をなし、ヨコナデを行う。8は口径18cm、9は口径21cm、12は口径20cmである。11は器台の口縁部で、口径は20cmである。内面にヨコナデ、外面にミガキを施す。いずれも弥生時代後期の遺物である。16・17はSD9からの出土である。16は壺の口縁部で、口径14.4cmである。19はSD13からの出土、20・21はSD13周辺から出土した遺物である。19～21は東北地方天王山式系統の土器と考えられる。いずれも深鉢の体部破片と考えられ、無文地に円状の刺突を施す。胎土に粒の大きな砂が混じる。内面に炭化物が付着する。22～38は遺物包含層からの出土である。遺物の取り上げは第②・③層上面で行った。いずれも壺の口縁部である。22は口縁部がくの字に外傾する。2次焼成のため黒褐色を呈し、口径は14cmである。23～38は壺の口縁部である。いずれも口縁部が立ち上がり複合口縁となるものである。23は口縁部の立ち上がりが丸みをおびるもので、内外面ヨコナデを行う。口径は18cmである。24は内外面ヨコナデを行い、口径16cmである。25の口径は12cmで、摩耗のため調整は不明である。26は内外面ヨコナデを施す。口径は18cmである。27は比較的幅の広い口縁部に3条の平行沈線を施す。外面に炭化物が付着する。28は口縁部がゆるく外傾し、内外面ヨコナデを行う。口径は16cmである。29は内外面ヨコナデを施す。口径は19cmである。30は口縁端部を平坦におさめる。口径は14cmを測る。31は内外面にヨコナデを施し、口径は15cmである。32は摩耗のため調整は不明である。口径は19cmである。33は口径16cmで、外面に炭化物が付着する。34は口径14cm、内外面ヨコナデを施し、外面に炭化物が付着する。35は口縁がゆるく外傾する器形で、摩耗のため調整は不明である。口径は14cmである。36は内外面ヨコナデを施す。強いヨコナデのためわずかに口縁部が凹む。外面に炭化物が付着する。口径は17cmである。38は口縁がわずかに立ち上がる。口径は24cmである。

図版4の1～46は遺物包含層からの出土である。遺物の取り上げは第②・③層上面で行ったものである。1～9は壺の口縁部である。1～6・8・9は複合口縁を有する。1は内外面ヨコナデを行い、口径12cmである。2は内外面ヨコナデを行い、口径は15cmを測る。3は口径17cm、外面に炭化物が付着する。2次焼成のため全体に墨ずんでいる。4は口縁の立ち上がりが短く、内外面ヨコナデを施す。口径は16cmで、外面に炭化物が付着する。5は口径15cmを測り、内外面ヨコナデを施す。6は口縁部が直線的に立ち上がる。内外面ヨコナデを施し、外面に炭化物が付着する。口径は18cmである。8は口縁端部が面を持ち、器壁が厚手である。内外面ヨコナデを施し、外面に炭化物が付着する。9は口径19cmを測り、内外面ヨコナデを施す。外面に炭化物が付着する。7は壺の口縁部である。口唇部は平坦である。焼成が良好で黄橙色を呈する。内外面ヨコナデを施す。口径は15cmである。10は口縁部の立ち上がりが比較的幅広の複合口縁である。内外面ヨコナデを施し、口径は20cmを測る。11は複合口縁の壺である。内外面ヨコナデを

行き、口径は20cmである。12は壺の口縁部と考えられる部分にヘラ描きによる文様が描かれている。ハケメを施した後に文様を描いている。13も12と同様にハケメ調整後、ヘラ描きの文様を描いた破片である。14~26は壺の底部破片である。14・15は底径5cmで、内面に炭化物が付着する。16は底径5cmで、底部は凹底である。17は底部から大きく述べる器形である。底径は4cmで、外面に炭化物が付着する。18は底径6cmである。底部は平底で中央に凹部をもつ。内面に炭化物が付着する。19は底径5cm、20は平底で底径4cmである。外面に炭化物が付着する。21は平底で底径5cmを測る。内面に炭化物が付着する。22は底径6cmであり、外面にハケメを施す。内外面ともに黒ずみ、炭化物が付着していたものと考えられる。23は底径5cmである。平底で中央に凹部をもつ。24は底径6cmで、内面にハケメが見られる。25は底径5cmであり、底部は凹底である。内面にハケメが見られる。26は底径5cmである。27は壺の口縁部で口唇部に面をもつ。外面はヨコナデを施し、内面は摩耗のため調整は不明である。外面に炭化物が付着する。口径は14cmである。28は口唇部が平坦な壺の口縁である。内外面ヨコナデを施し、外面に炭化物が付着する。29は口縁部がくの字に外反するものである。口径は16cmを測る。30は27と同様な壺の口縁部である。口径は15.8cmである。外面に炭化物が付着する。31は器台の口縁部と考えられる。口径は19.7cmである。35・36・37は高坏の坏部である。いずれも坏部が中位で屈曲して口縁部が外反するものである。35は屈曲部分の径が16.2cmである。色調は淡黄色である。36は屈曲部分の径が19.8cm、37は20.6cmである。色調はいずれも淡黄色を呈する。38~43は高坏または器台の脚柱部である。38・39・42は脚台がハの字状に開くものと考えられる。41・43は脚台部の開きが大きい。いずれも淡黄色を呈する。39・42・43はミガキの跡がわずかに残るが、いずれも摩耗している。43は脚台部が開く部分にハケメが施されている。44・45・46は高坏または器台の脚台部である。44・45は端部が反り、46は端部を丸くおさめる。44は脚端部径20cm、内面にハケメを施す。内面淡黄色、外面灰褐色を呈する。45は脚端部径16cmである。焼成は良好で淡黄色を呈する。内外面に赤彩が残る。46は脚端部径16cmである。色調は黄褐色を呈する。いずれも弥生時代後期のものである。

図版5の1~42は遺物包含層からの出土である。1~10は第②・③層上面で取り上げたものである。11~42は第5層上面で取り上げた。1~10は高坏または器台の脚台部である。1は脚端部径12cmであり、外面にミガキを施す。内面には赤彩が残る。2は脚端部径16cmである。色調は淡黄色である。3は脚端部径22cmであり、外面にミガキ、内面にナデを施す。色調は淡黄色である。4は脚端部径14cm、5は脚端部径16cmである。6は高坏の脚端部に粘土帯を張り付けるものである。脚端部径22cmである。7~10は脚端部の反りが大きいものである。7は脚端部径17cmである。色調は灰褐色である。8は脚端部径24cmで、数条の平行沈線をめぐらす。内面にはハケメを施す。色調は黄褐色である。9は脚台部が大きく反るものである。脚端部径24cmである。10は脚端部径24cmで、色調は灰褐色である。いずれも弥生時代後期のものである。11~14は壺の口縁部である。口縁部内側に段をなし、短く立ち上がる幅の狭い複合口縁である。いずれも口縁部の調整はヨコナデである。11は口径9.8cm、12は口径17cmである。13は口径16cmである。厚手の作りであり、口縁部に丸みをもつ。外面に炭化物が付着する。14は口径17.8cmであり、外面に炭化物が付着する。11・14は黄褐色、12・13は淡黄色である。いずれも弥生時代後期のものである。15~42は壺の口縁部である。15は口径13.2cm、色調は淡黄色である。16は屈曲の弱いくの字口縁である。口径は16cmである。17は短く立ち上がる幅の狭い複合口縁をもつ。口縁は直立して立ち上がり、口径は15.2cmを測る。18は口縁がゆるく屈曲し、口径は11cmである。外面に炭化物が付着する。19は屈曲の弱いくの字口縁の壺で、口径は15.6cmである。口縁部にはヨコナデ、頸部外面にはハケメを施す。20・21は複合口縁の壺である。20は口縁部が直立して立ち上がり、屈曲部に稜が強く入る。口径は16.1cmである。21は口縁が強いヨコナデにより凹む。口径は15.2cmである。22は幅の広い複合口縁となり、屈曲部に稜が強く入る。口径は16.2cmである。23は口縁部の屈曲がゆるいものである。小型の壺と考えられる。口径は13cmである。24・27は口縁部が直立して立ち上がり屈曲部分に稜が強く入る。24の口径は16cm、27の口径は

15cmである。24・27ともに外面に炭化物が付着する。25は口縁部が外反し、口唇部が面をなす。口径は16.5cmを測る。外面に炭化物が付着する。26は口縁部の屈曲が丸みをもっている。口径は14.2cmであり、外面に炭化物が付着する。28の口唇部は面をなして横をむく。口径は16.2cmである。外面に炭化物が付着する。29は口径15.6cmである。30はヨコナデ調整を施し、口径は16cmである。31は口縁部が丸みをもち、口径は16cmを測る。外面に炭化物が付着する。32はくの字口縁の壺である。口唇部は面をもって横をむき、口径は17.2cmである。33-42は口縁部の幅が比較的狭い複合口縁の壺である。いずれも口縁部の調整はヨコナデである。33は口径16cm、外面に炭化物が付着する。34は24・27と類似の器形で、口径17cmである。外面に炭化物が付着する。35は厚手の作りで、屈曲部が丸みを持つ。口径は19.4cmである。外面に炭化物が付着する。36は口径15.2cm、37は17cmである。いずれも外面に炭化物が付着する。38は16cm、39は16.8cm、40は16cmである。40は口唇部を平坦におさめる。41は口径16.5cm、42は18.6cmである。42は屈曲部が厚く丸い作りである。いずれも外面に炭化物が厚く付着する。

図版6の1-33はいずれも遺物包含層からの出土である。遺物の取り上げは第5層上面で行った。1-29は壺の口縁部である。1-2は口縁部が幅の狭い複合口縁となるものである。いずれも口縁部にヘラ状工具で刺突を行う。2は体部外面にハケメを施す。口径は1が13.2cm、2が15.0cmである。3は幅の広い複合口縁となるものである。口縁部を厚手に成形し、平行沈線を4条めぐらす。口径は19.6cmである。4-5は幅の狭い複合口縁である。いずれも口縁部にヘラ状工具で刺突が施される。4は口径14.0cm、5は口径17.0cmである。いずれも外面に炭化物が付着する。6は体部外面にハケメ、内面にヘラケズリを施す。口径は17.2cmである。7-8は複合口縁で、いずれも口縁部にヘラ状工具で刺突を施す。7は強いナデにより口縁部が凹む。7の口径は15.0cm、8の口径は15.2cmである。8の体部外面にはハケメを施す。9は屈曲の弱い複合口縁となるものである。口径は19.2cmである。10-26はいずれも幅の狭い複合口縁である。口縁部にはいずれもヨコナデを施す。10-17・19・24は口縁部に刺突を施す。18・22・23・25・26・27は糊状具で口縁部に刺突を施す。24・27は口縁端部を欠いたものである。28は口縁部の幅が比較的広い複合口縁である。体部外面にハケメを施す。口径は10が18.0cm、11が16.0cm、12が18.2cm、13が16.2cm、14が16.2cm、15が18.8cmである。16は15.0cm、17は16.2cm、18は20.0cmを測る。19は15.0cm、20は16.0cm、21は19.0cm、22は13.0cmである。また23は14.0cm、25は13.0cm、26は16.0cm、28は15.3cm、29は15.0cmである。30-33は壺の口縁部である。30・32・33は口縁部が立ち上がる。口径は、30が15.0cm、31が13.2cm、32が14.3cm、33は20.0cmである。30・31・33は淡黄色、32は黄橙色を呈する。34・36は壺の口縁部で、34の口径は16.0cm、36の口径は20.0cmである。35は高杯の脚台部であり、黄橙色を呈する。37は器台の脚台部である。脚部口径は18.0cmである。いずれも弥生時代後期の遺物である。

図版7の1-51はいずれも遺物包含層からの出土である。遺物の取り上げは第5層上面で行った。1-4は壺の体部破片である。いずれもヘラ状工具による刺突、ハケメを残す。5は壺の頸部である。外面にハケメを施し、色調は黄橙色である。6-36は壺または壺の底部破片である。6は平底で底径は3.9cmである。灰褐色を呈する。7の底径は5cmである。淡黄色を呈する。内面に炭化物が付着する。8は平底で底径は2.6cmである。内外面に炭化物が付着する。9の底径は2.7cmである。灰褐色を呈する。10は底部を穿孔する。底径が約4cmになるものと推測できる。内面にはヘラケズリの跡が残る。淡黄色を呈する。11は比較的の底径が大きく、薄手ものである。底径は5cmである。内外面炭化物が付着する。12の底部は平底で中央に凹部をもつ。底径は4cmで、淡黄色を呈する。13は底部に凹部をもつ。底径は4.8cmである。黄褐色を呈し、内面に炭化物が付着する。14は平底で大きく開く。底径は5cmを測る。黄褐色を呈し、外面上に炭化物が付着する。15は中央に凹部をもつ。底径は5.4cm、灰黄色を呈する。外面上に炭化物が付着する。16は外面上にハケメを施し、炭化物が付着する。底径は5cmで、色調は黄褐色を呈する。17は平底で灰褐色を呈する。炭化物の付着はないが、2次焼成のためと見られる黒ずみがある。底径は5cmである。18は平底で、底径

は3.5cmである。19は底部に凹みをもち、底径は4.5cmである。内面にハケメを施し、淡黄色を呈する。20は底径5.4cm、外面に炭化物が付着し、黄褐色を呈する。21は底径が4.2cmで平底である。外面にハケメを施す。22は平底の中央に凹みをもつ。底径は5.0cmであり、外面には2次焼成のためと考えられる黒ずみがある。23は平底で底径5cmである。灰褐色を呈する。24は凹底で内外面に炭化物が付着する。底径は4.5cmである。25は底径が4.5cm、内面にハケメを施す。内外面炭化物が付着する。26は底部が穿孔されている。内外面ハケメを施し、色調は淡黄色である。底径は3.8cmを測る。27は平底の底部に穿孔を有す。灰褐色を呈し、外面に炭化物が付着する。底径は4.4cmである。28は平底で底径4.8cmである。外面にハケメを施し、内外面炭化物が付着する。29は平底で底部が穿孔されている。底径は4cmである。30は凹底で底径は4.7cmである。黄褐色を呈する。31は底部が大きく、開きも大きな器形である。底径は7cmを測る。色調は淡黄色である。32は平底の中央に凹みをもつ。内面にハケメを施し、外面に炭化物が付着する。33は底部が平底で薄い。大きく開く器形である。底径は6cmで黄橙色を呈する。34は底部が凹底である。底径は4.6cmであり、内面に炭化物が付着する。35は底部が大きく、平底である。内面に炭化物が付着する。36は底径4.6cmである。37~40は高坏または器台の口縁部であり、いずれも端部は面をなす。37は口径15.9cm、38は口径18cm、39は口径17cmである。40は口径18cmである。41は高坏坏部の削曲部である。42・43は高坏または器台の口縁部である。いずれも口唇部は面をなす。42は口径28cm、43は口径32cmを測る。44は高坏の口縁部である。坏の中位で屈曲し外反する。口縁端部は肥厚し、口径32cmを測る。摩耗のため調整は不明である。45は小型の高坏の脚台部と考えられる。ハの字状に開き、脚端部径は15cmである。46~50は器台の口縁部である。いずれも口縁部が直線的に開き、口唇部が面をなすものである。46の口縁は18cm、47は13.8cm、48は19cm、49は20cm、50は24cmである。48は黄褐色を呈し、46・47・49・50は淡黄色を呈する。51は高坏の口縁部である。口径は26cmである。いずれも弥生時代後期の遺物である。

図版8の1~37は遺物包含層からの出土である。1~26・29・30が弥生土器である。1~6は高坏または器台の脚部である。2~4はハの字状に脚台部が開こうとしている部分である。3は高坏の坏底部と脚柱である。6は外面にミガキが見られるが、1~5は摩耗のため調整は判別しにくい。5は灰黄色、1~4・6は淡黄色である。7は高坏の口縁部である。口径は24cmを測る。8は高坏の脚台部であり、端部に面をもつ。脚端部径は15cmである。9は器台の脚台部である。端部に面をもち、脚端部径は16cmを測る。10~18は高坏の脚台部である。10・15は端部を折り返しておさめる。11・12・13・14・16・18は端部に粘土を張り付け、肥厚させるタイプである。17は脚端部が反るものである。11・12・14・15・18は浅黄色で、10・13・16・17は灰黄褐色を呈する。19・20は壺の体部破片で、ハケメを施す。21は壺の頸部である。内外面ハケメを施す。22は壺の頸部で黄褐色を呈する。23は壺の頸部で内面にハケメを施す。淡黄色を呈する。25・26は壺の底部破片である。25は外面にハケメ、26は外面にハケメを施した後にミガキ、内面にハケメを施す。29・30は壺の底部である。29・30は底部が凹底である。29は底径は4.6cm、30は底径が4.4cmである。いずれも弥生時代後期の遺物である。

中・近世の遺物（図版8、図版24）27は土師器の皿である。手すくねで乳白色を呈する。胎土は密で焼成は良好である。口径は9.2cmである。28は赤地不明陶器の皿である。口縁部は直線的に開く。口径15cmである。ロクロナデが行わされており、色調は乳白色を呈する。31は越中瀬戸の皿である。口径は13cmである。口縁部内外面に鉄釉を施す。34は越中瀬戸の皿である。口径は16cmである。口縁部内外面に灰釉を施す。33は越中瀬戸の碗であり、鉄釉を施す。口径13cmである。37は越中瀬戸の皿である。内外面に灰釉を施す。口径13cmである。32は伊万里の皿である。口径は14cmである。19世紀代のものと考えられる。35は珠洲焼堀の体部破片である。36は産地不明陶器の桶り鉢である。

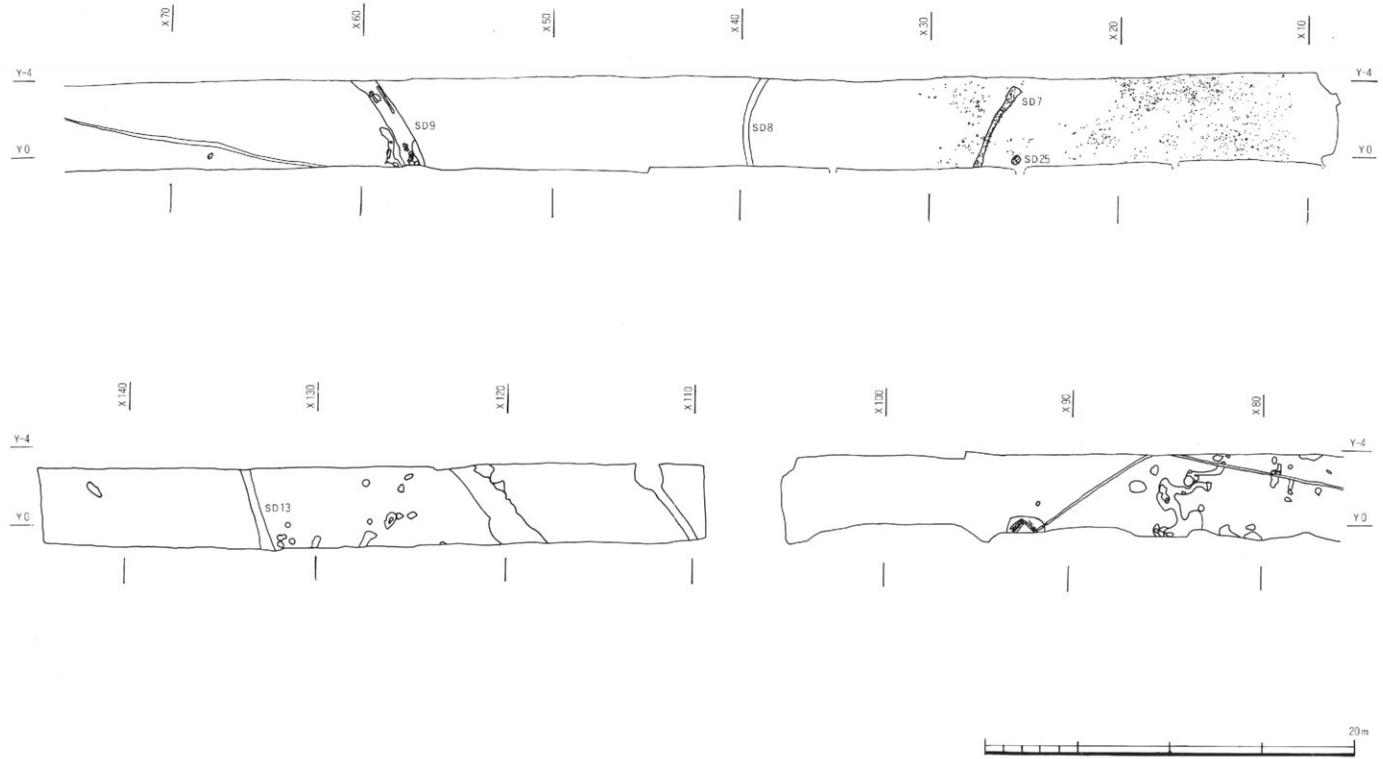
V まとめ

調査より前章まで述べたような結果を得たが、以下これらをまとめておく。

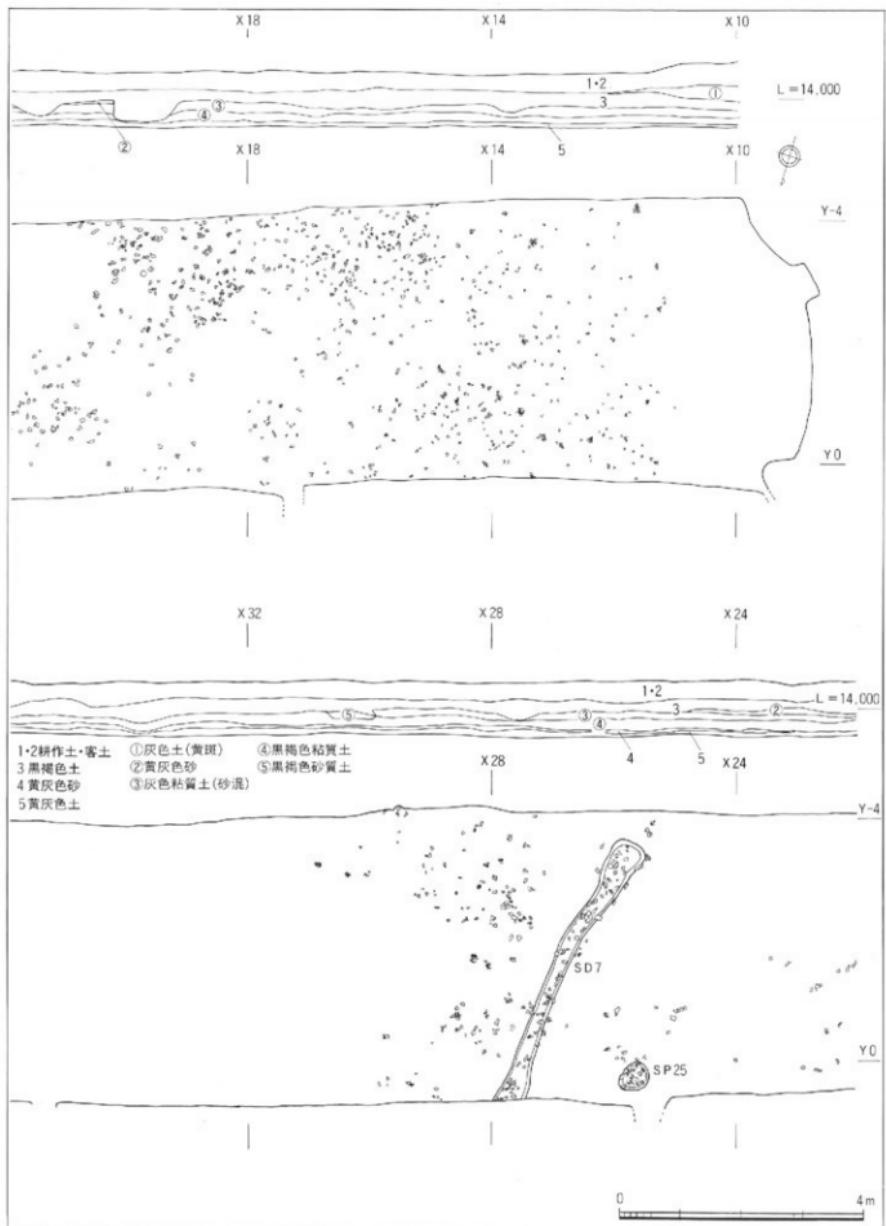
1. 本調査により検出した遺物は弥生時代後期のものである。昭和53・54年度に調査されたものと同一時期と考えられる。
 2. 東北地方天正山式系統の土器が検出された。北陸と東北との関連を示すものといえよう。
 3. 遺跡の東側には南から北方向へ上器破片の広がりが見られ、水害により流れ込んだものと推測できる。また今回南側から土器破片が流れ込んでいるため、調査区の南側には数棟の住居または集落などがあったと推測する。
 4. 遺構は溝が多く検出されたが、弥生時代に属するものはすべて南北方向に走っている。
- 昭和54年度に調査された集落が今回調査の東側に位置する。またこの周辺一帯には下経田・正印新・飯坂・中小泉・江上Bなどの弥生時代各遺跡が確認されている。弥生時代後期、これらの遺跡が関連をもって存在していたと考えられており、今回調査を行った範囲の周辺にも、さらに数棟の住居・集落などの存在を想定できる。

引用・参考文献

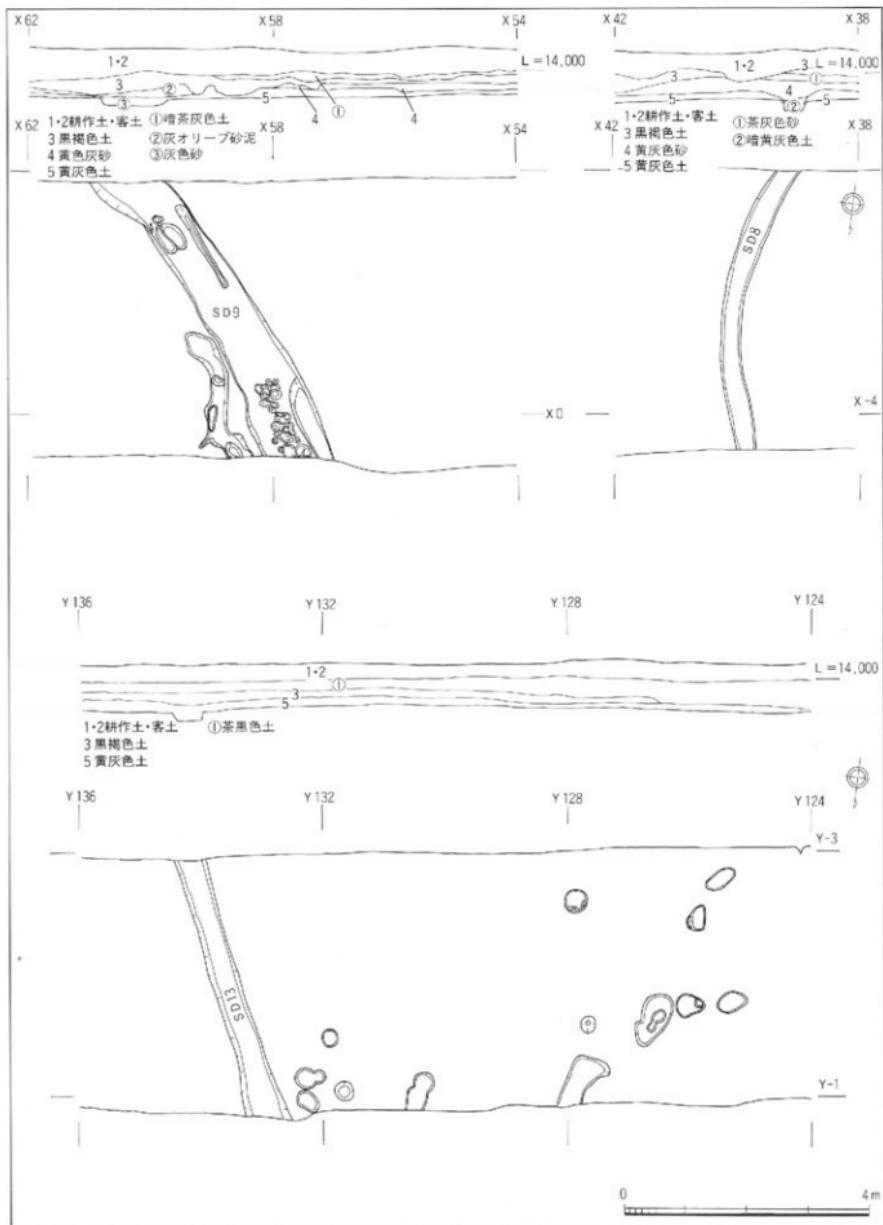
- ア 荒木繁行・吉岡康暢 1970 「金沢市畠田弥生遺跡調査予報」 石川考古学会会誌 第13号
- キ 岸木雅敏 1982 「V 飯坂遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告—上市町土器・石器編一』 上市町教育委員会
- ク 久々忠義 1981 「江上A遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告—上市町遺構編一』 上市町教育委員会
- 久々忠義 1982 「VI 江上A遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告—上市町土器・石器編一』 上市町教育委員会
- ハ 橋本澄夫 1966 「弥生文化の発展と地域性—北陸—」『日本の考古学 III』 川出書房
- 橋本澄夫 1973 「次場遺跡」『羽咋市史』 原始・古代編
- 橋本澄夫 1975 「入門講座・弥生土器一中部 北陸1~4ー」『考古学ジャーナル』 106・107・109・111
- 橋本 正 1981 「IV まとめ」『北陸自動車道遺跡調査報告—上市町遺構編一』 上市町教育委員会
- 橋本正春 1981 「VII 江上B遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告—上市町土器・石器編一』 上市町教育委員会
- ヤ 谷内尾音司・三浦純夫 1976 「3 遺構の概要」『羽咋市吉崎・次場遺跡—第3次発掘調査外報一』 羽咋市教育委員会



第3図 遺構実測図 (縮尺1/200)



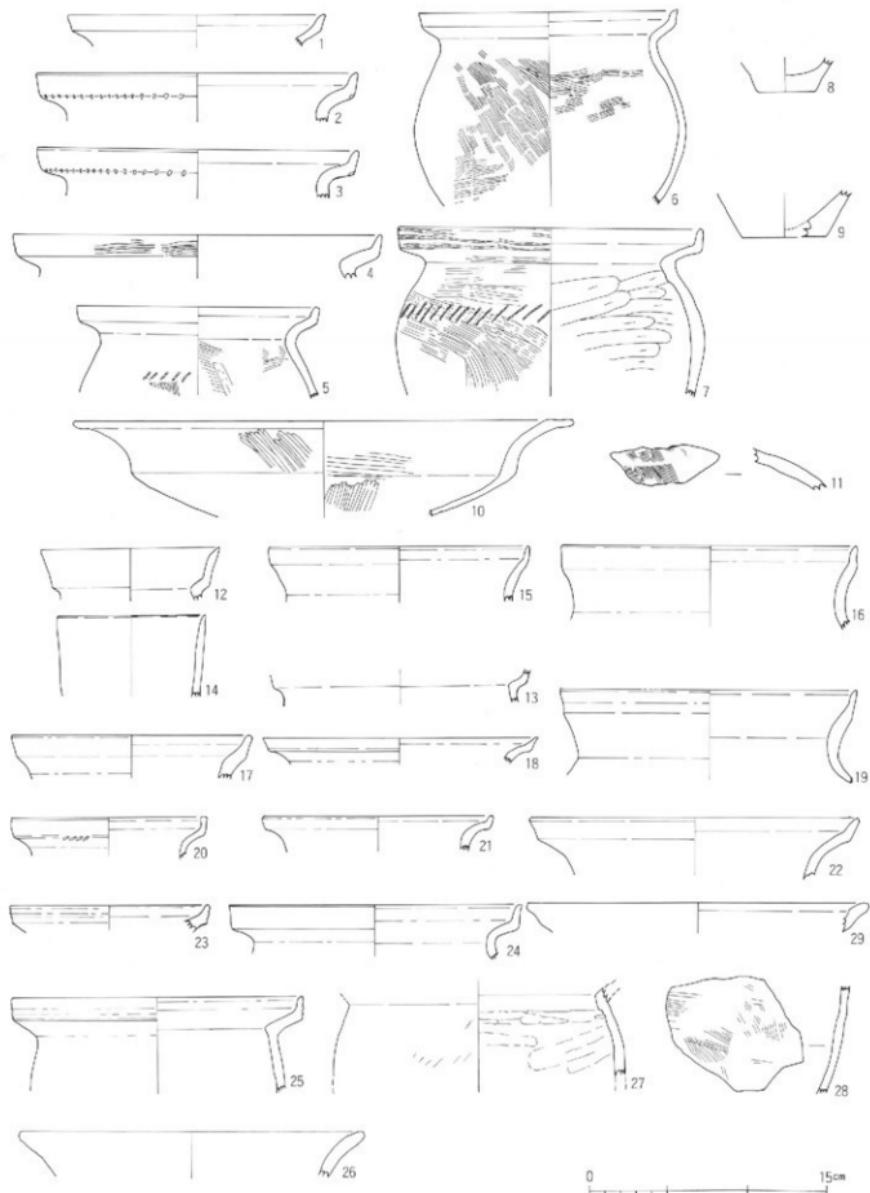
第4図 遺構実測図 (縮小1/80) 遺物集中地点・SD25・SD7



第5図 遺構実測図 (縮小1/80) SD8・SD9・SD13

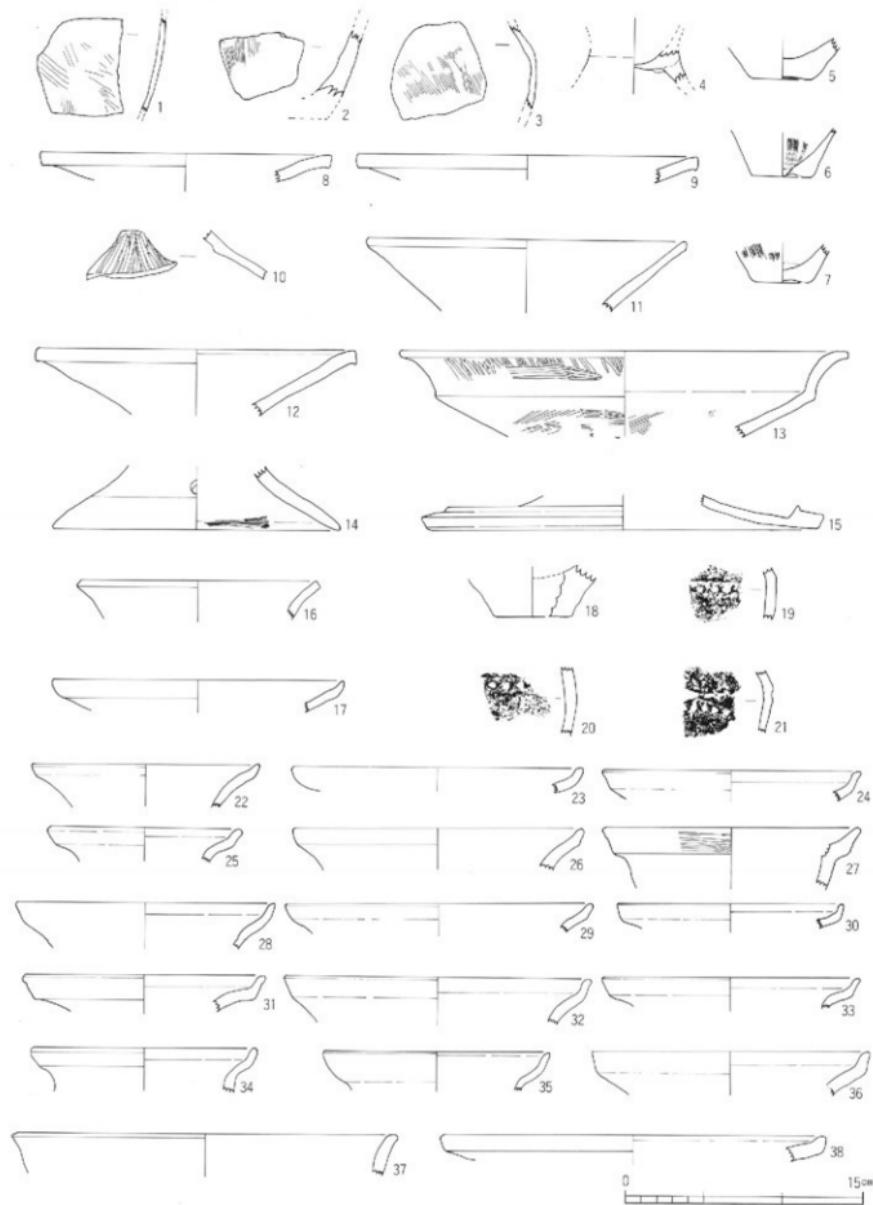


図版1 江上A遺跡周辺航空写真 (約1/6,000)



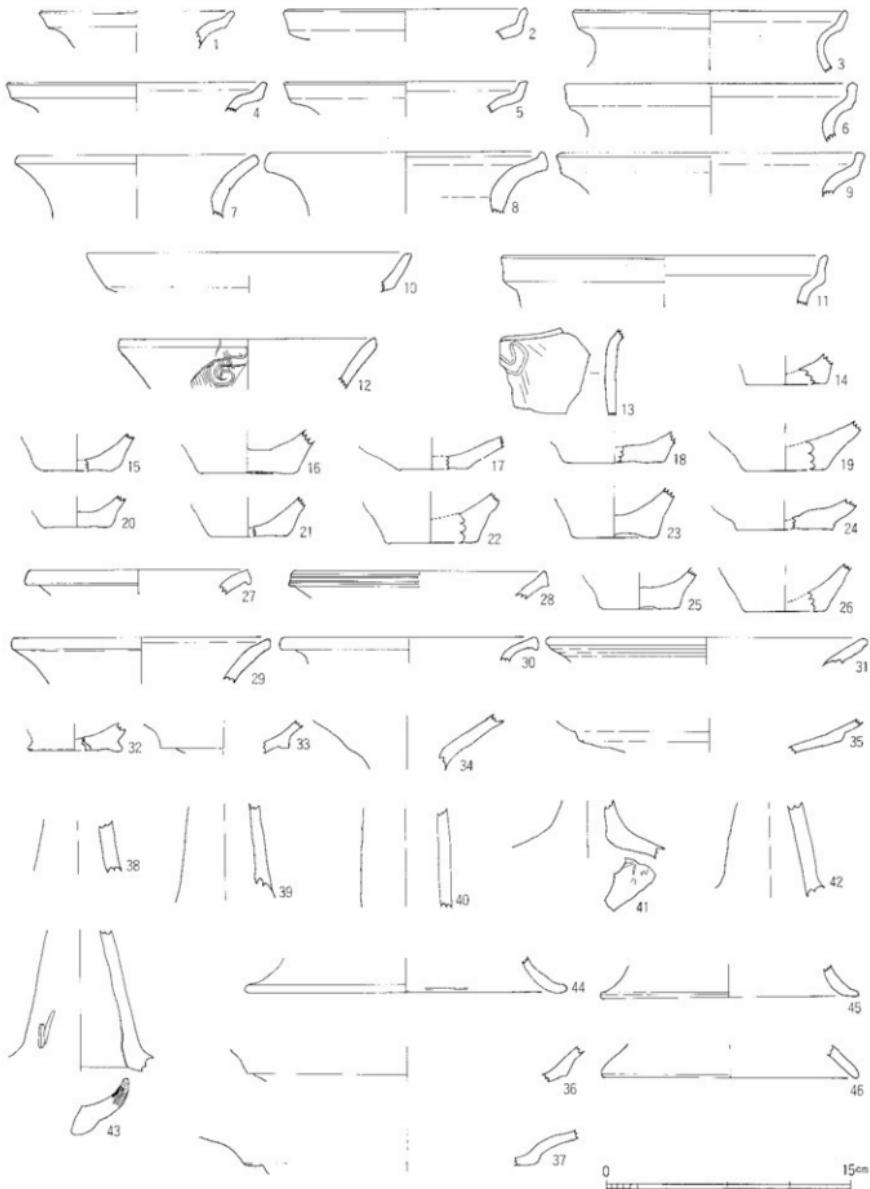
図版2 遺物実測図 (縮尺1/3)

弥生土器 1~10: SP25, 11: SP11, 12~13: 遺物包含層, 14~29: SD7

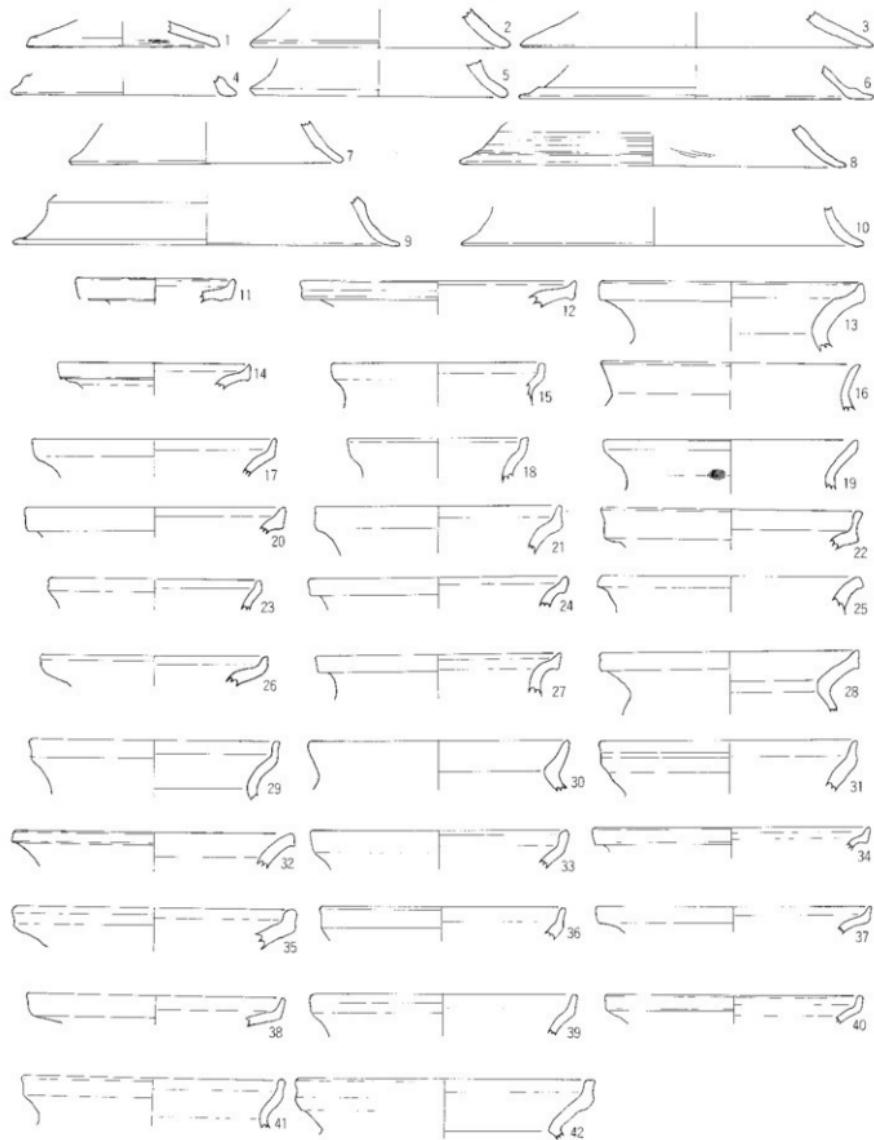


図版3 遺物実測図 (縮尺1/3)

弥生土器 1~15・18: SD 7, 16・17: SD 9, 19: SD 13, 20・21: 造構面(X133-Y0), 22~38: 遺物包含層

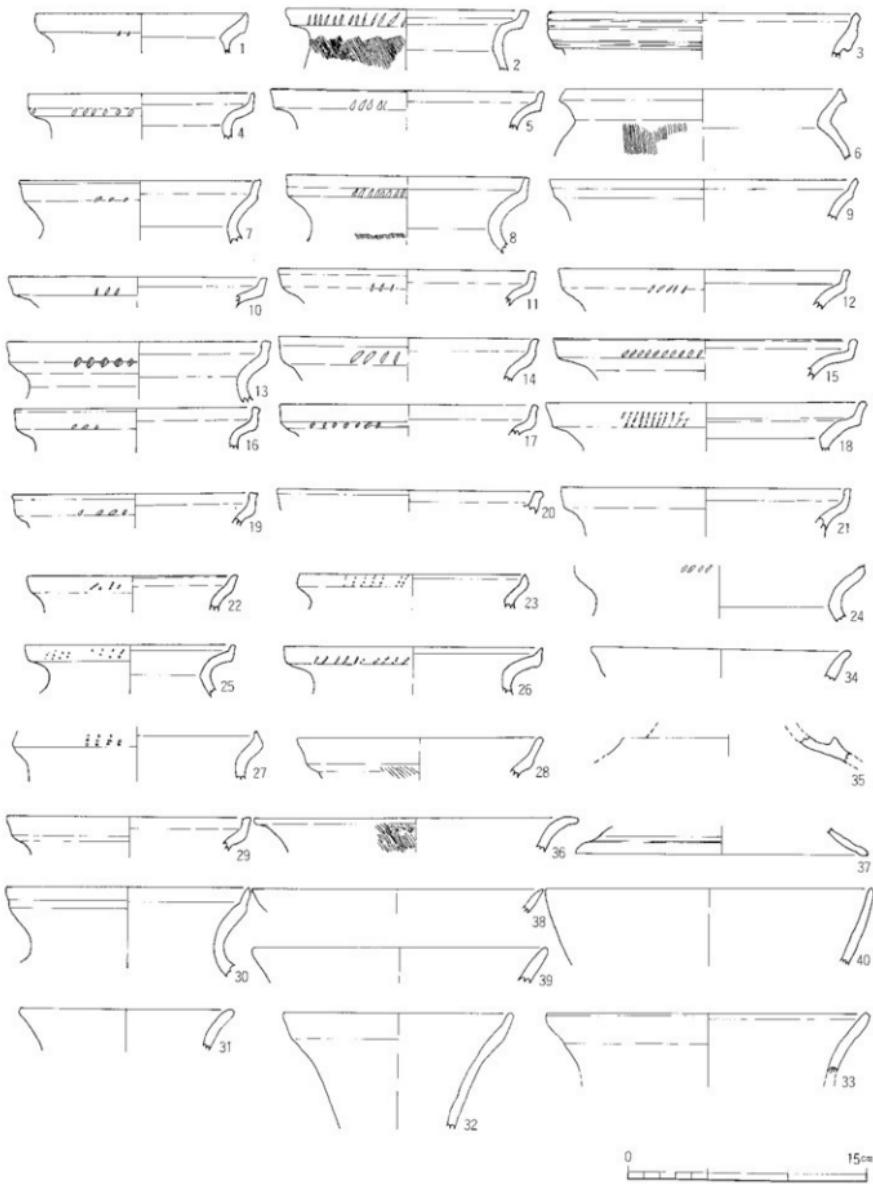


図版4 遺物実測図 (縮尺1/3)
弥生上器 1~46: 遺物包含層

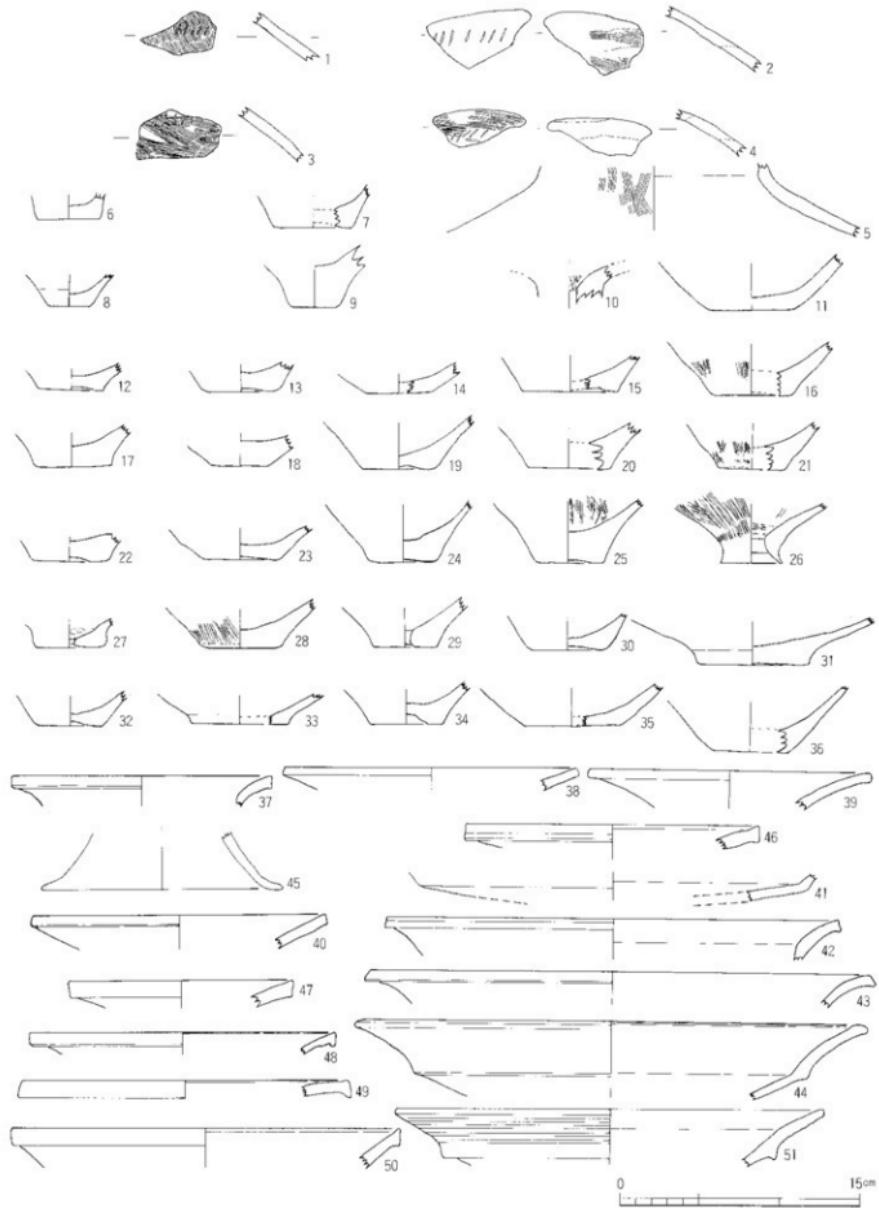


0 15cm

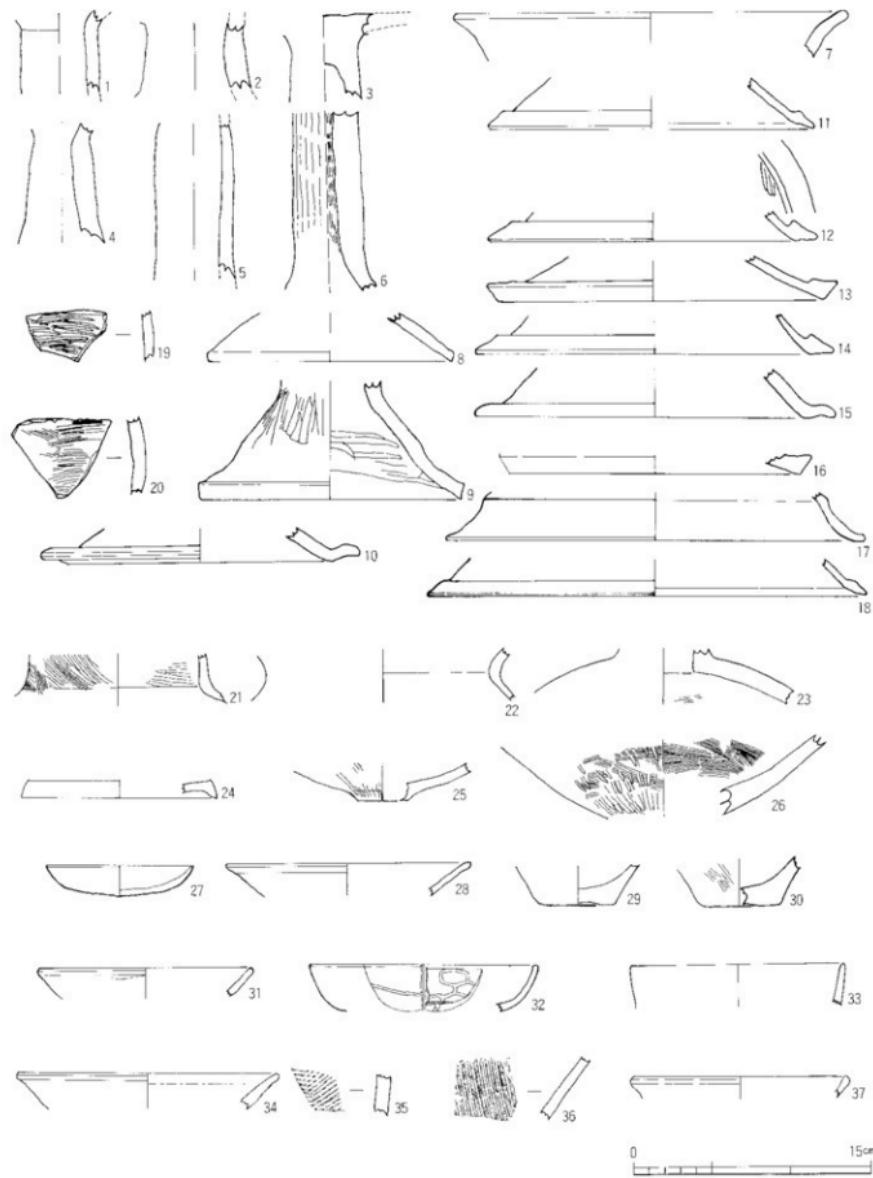
図版5 遺物実測図 (縮尺1/3)
弥生土器 1~42: 遺物包含層



図版6 遺物実測図 (縮尺1/3)
弥生土器 1~33: 遺物包含層

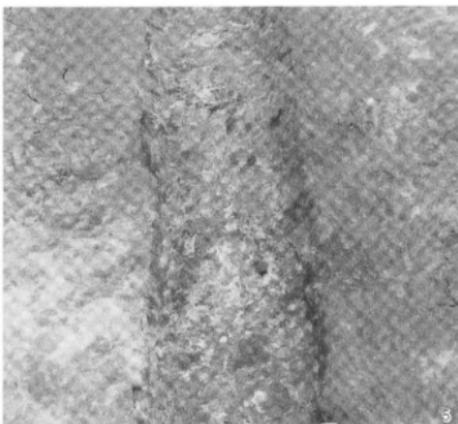
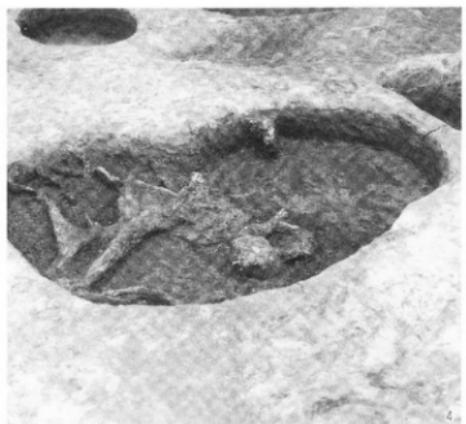
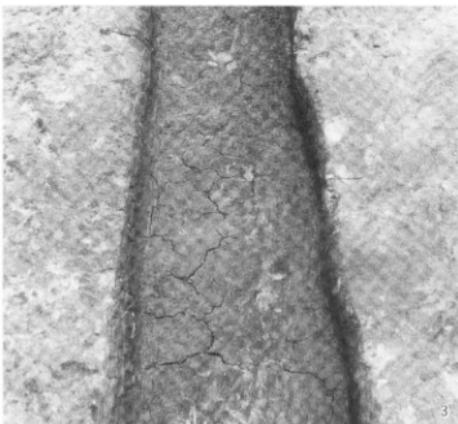
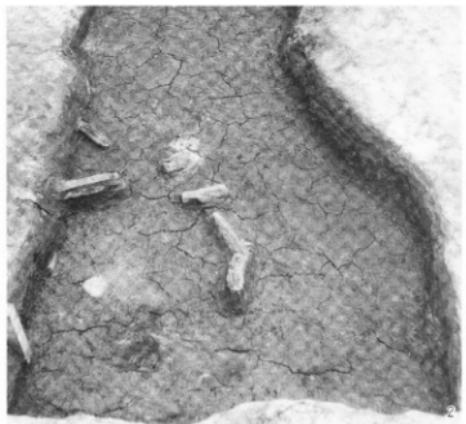


図版7 遺物実測図 (縮尺1/3)
弥生土器 1~51: 遺物包含層

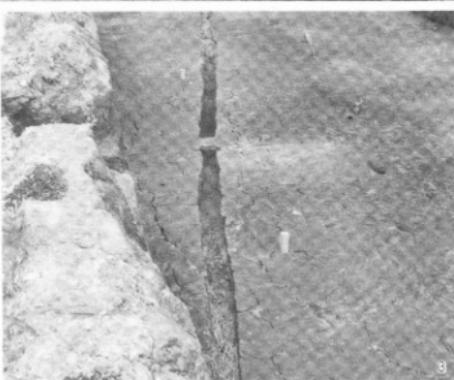


図版8 遺物実測図 (縮尺1/3)

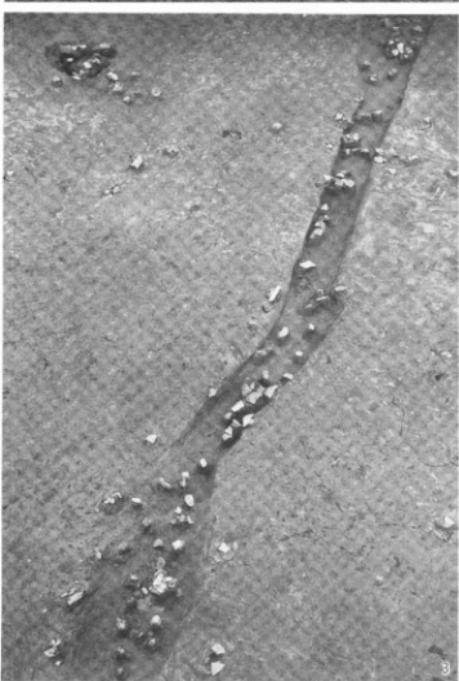
弥生土器 1~26・29・30: 遺物包含層, 土師器皿 27・28: 遺物包含層,
越中漬戸 31・33・34・36・37: 遺物包含層, 珠洲焼 35: 遺物包含層



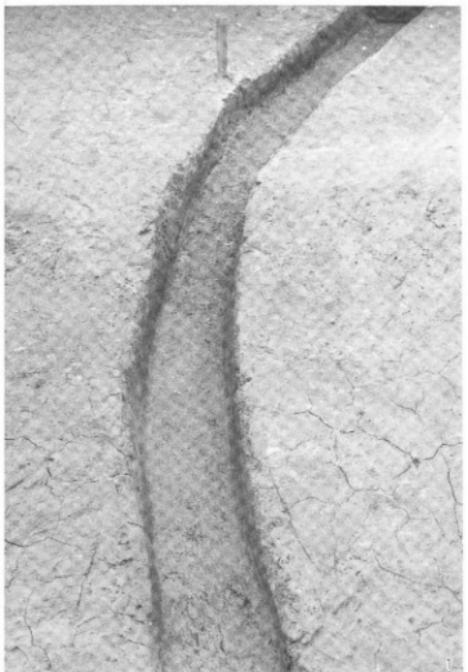
図版9 1.遺跡西側第②・③層上面検出状況(西より、手前からSD1, SD2, SD3),
2. SD2(北西より), 3. SD3(北西より), 4. SK3(南より), 5. SD4(北西より)



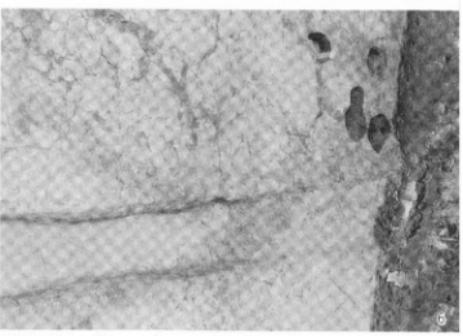
図版10 1. 遺跡西側第4層上面検出状況(東より), 2. SD5・SD6(北西より), 3. SD6(西より),
4. 表土剥ぎ風景, 5. 作業風景



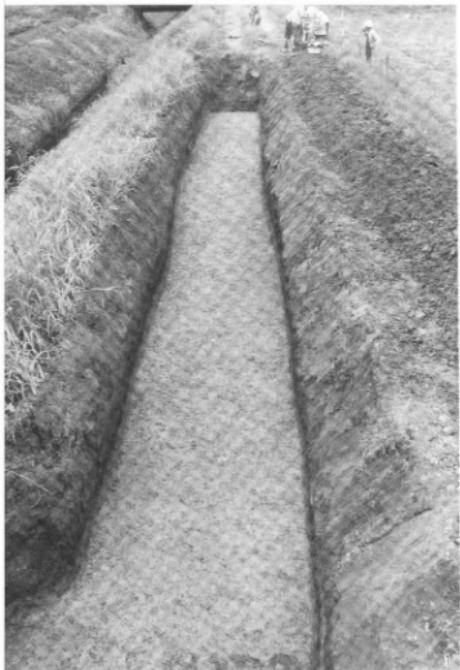
図版11 1. 道路西側第5層上面検出状況(西より), 2. 遺物集中地点(X10~X30)(南西より),
3. SD7遺物検出状況(南東より), 4. SD7遺物検出状況(北西より)



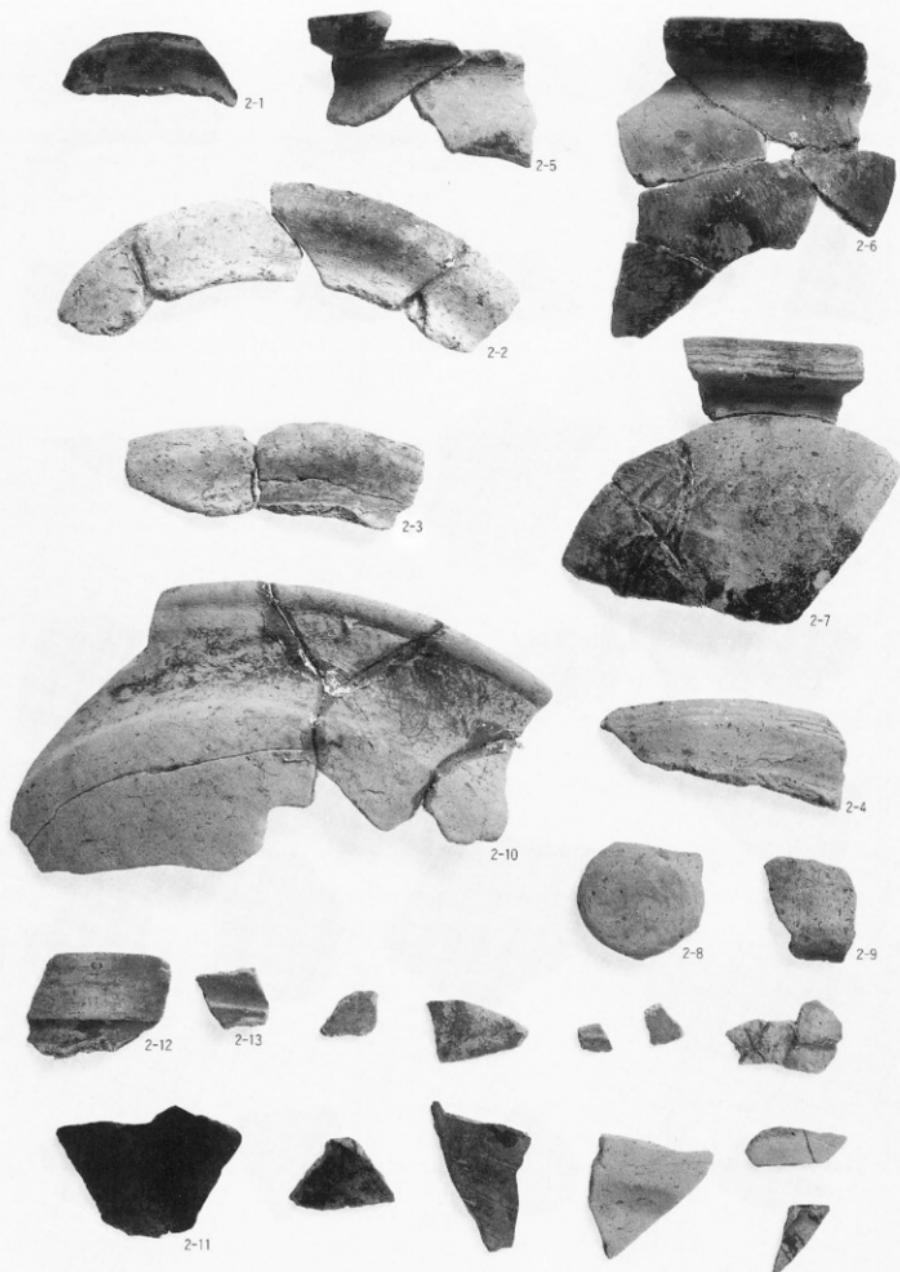
図版12 1 . SD8(北西より), 2 . SD9(北西より), 3 . SP25遺物検出状況(東より),
4 . 遺物集中地点(X 17～X 20), 5 . 作業風景, 6 . 遺物集中地点(X 17～X 20)



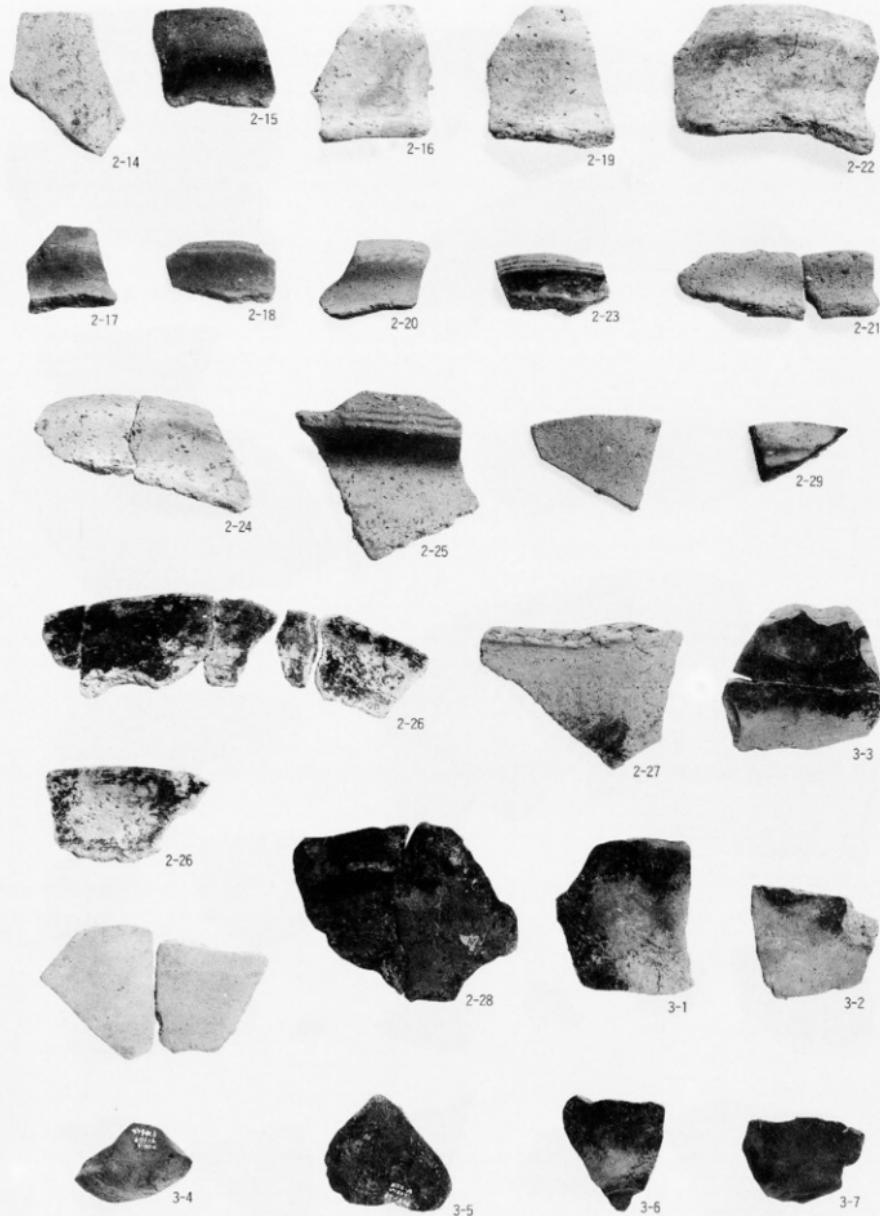
図版13 1.遺跡東側第5層上面検出状況(東より), 2.遺跡東側第5層上面検出状況(西より),
3. SD13(南西より), 4. SD12(南東より), 5. SX51(東より), 6. SD13(南より)



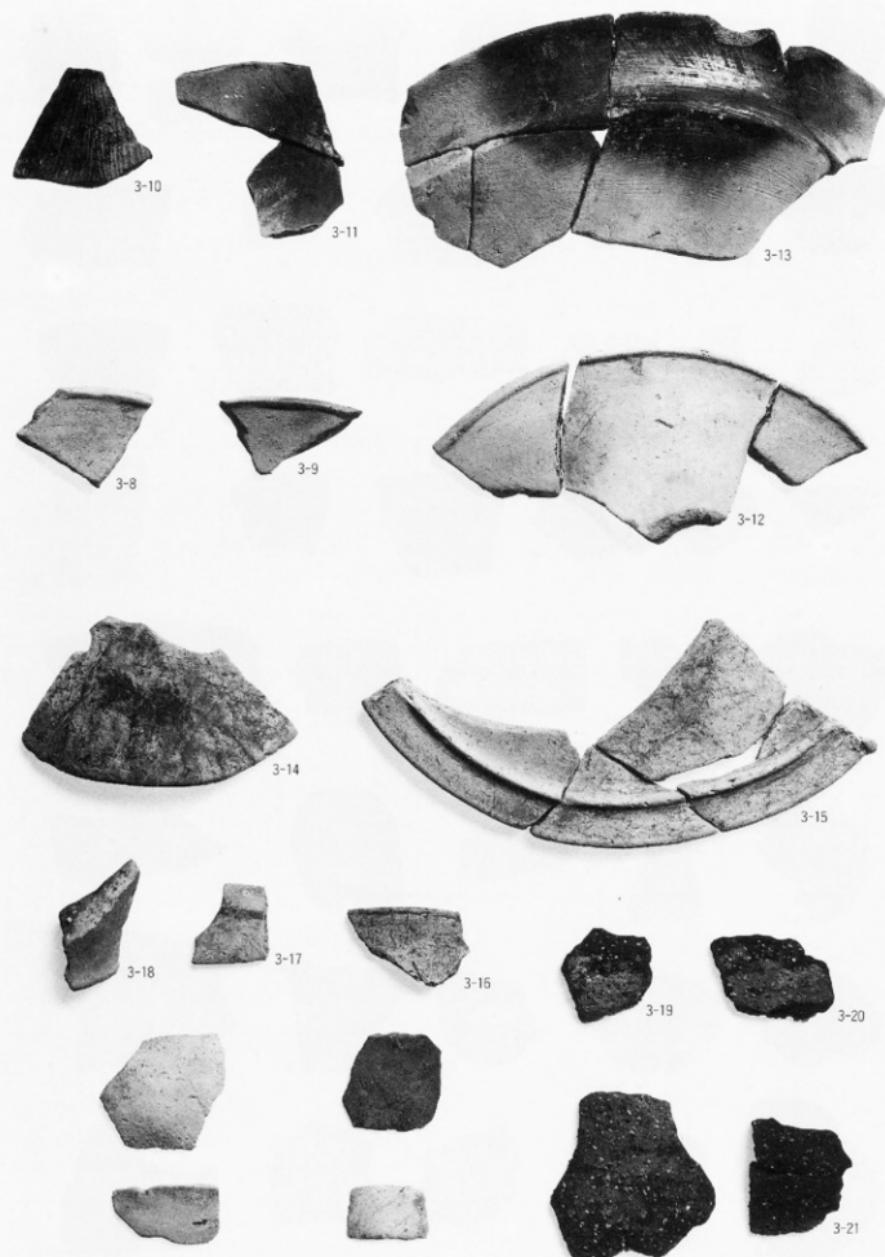
図版14 1. 試掘溝(西より), 2. 表土剥ぎ風景, 3. 試掘作業風景, 4. 試掘作業風景



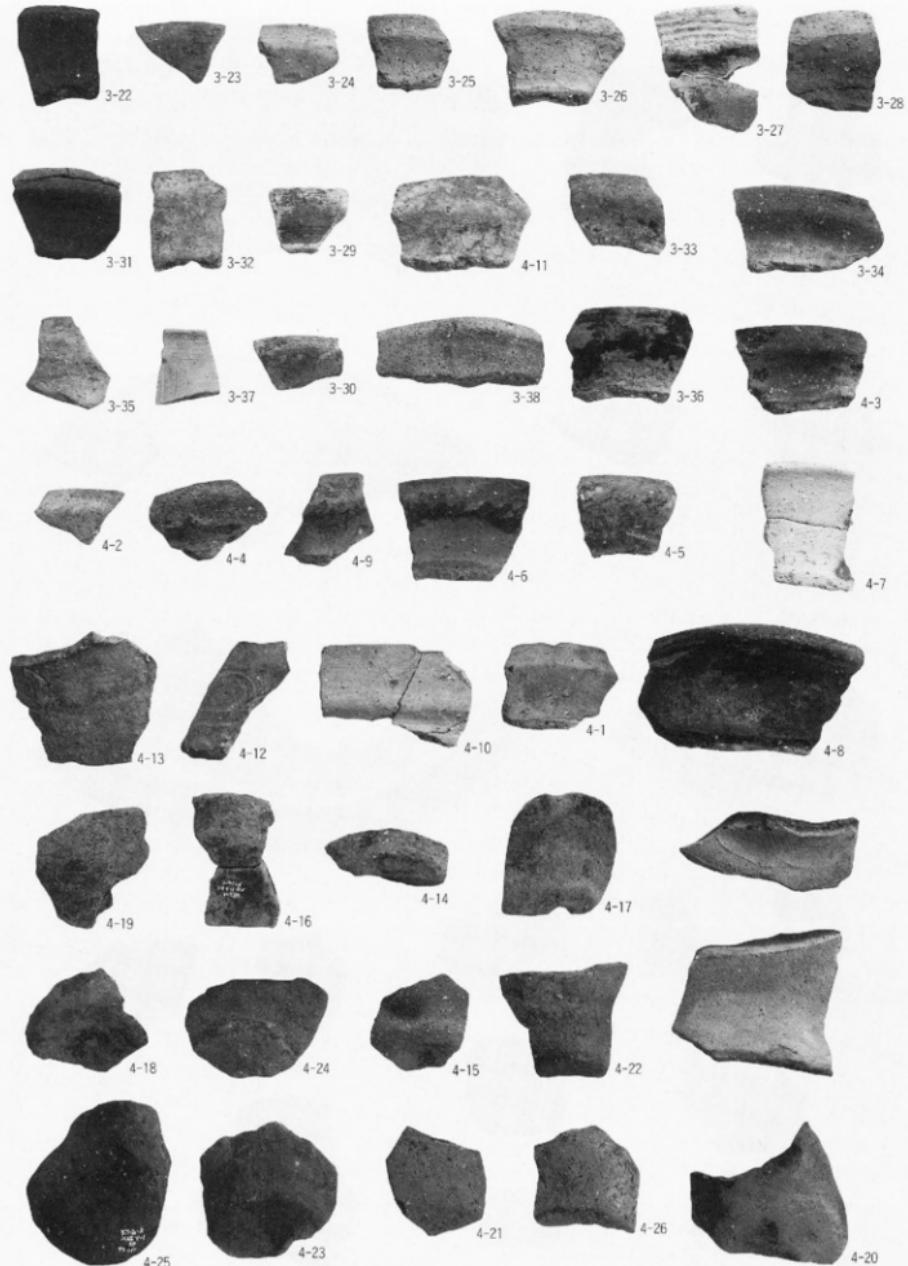
図版15 遺物写真 弥生土器・越中湖戸 (図版2参照)
(縮尺1/2)



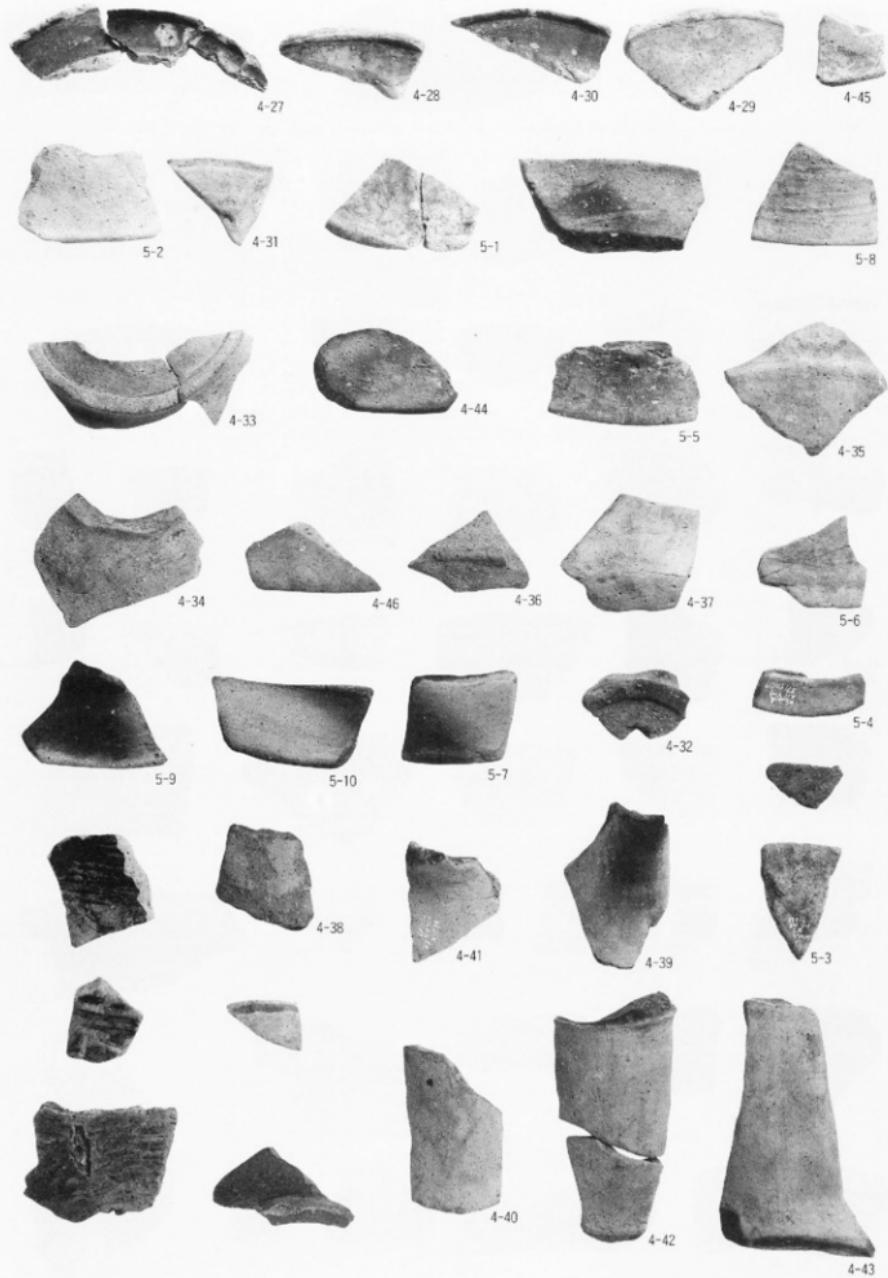
図版16 遺物写真 弥生土器 (図版2,3参照)
(縮尺1/2)



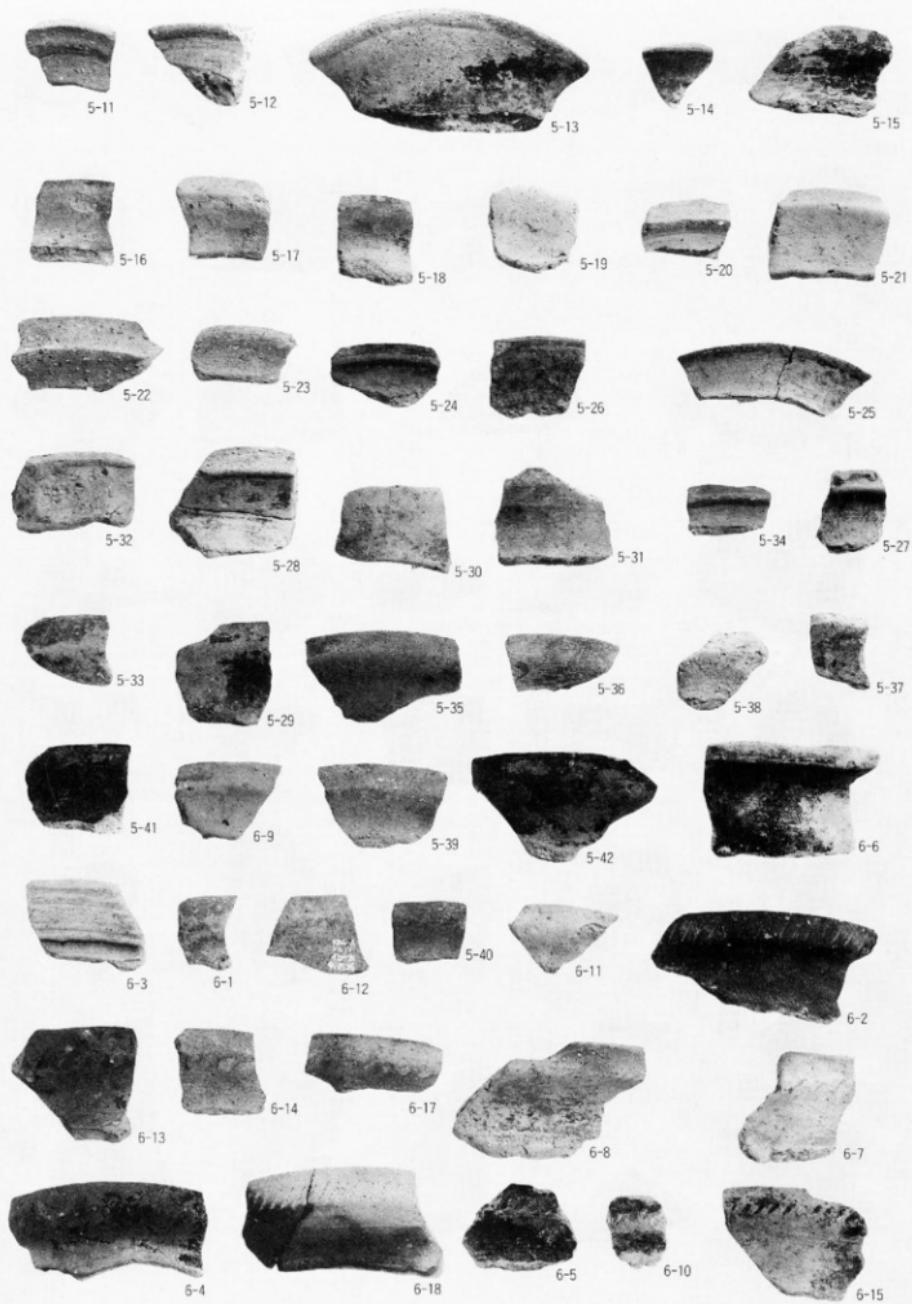
図版17 遺物写真 异生土器 (図版3 参照)
(縮尺1/2)



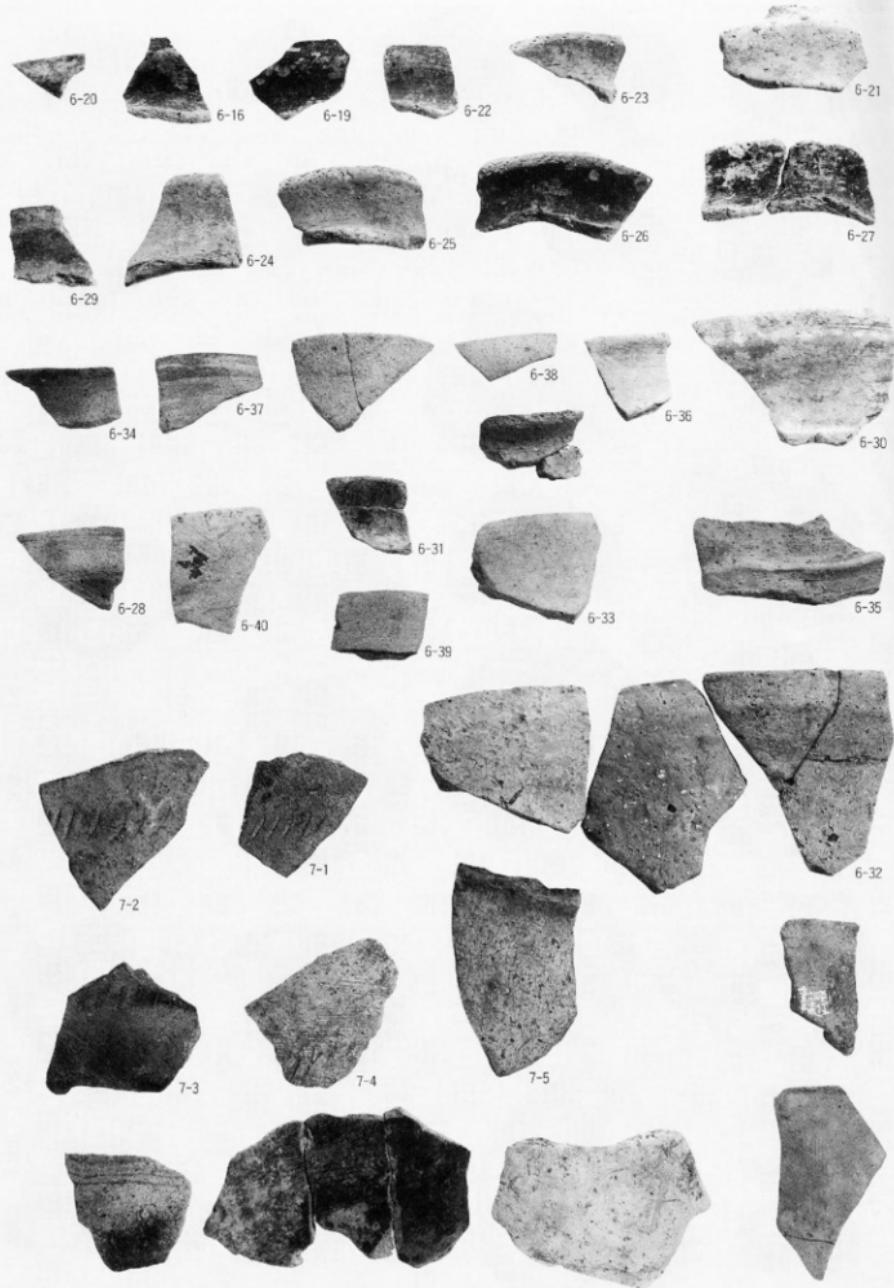
図版18 遺物写真 弥生土器 (図版3, 4 参照)
(縮尺1/2)



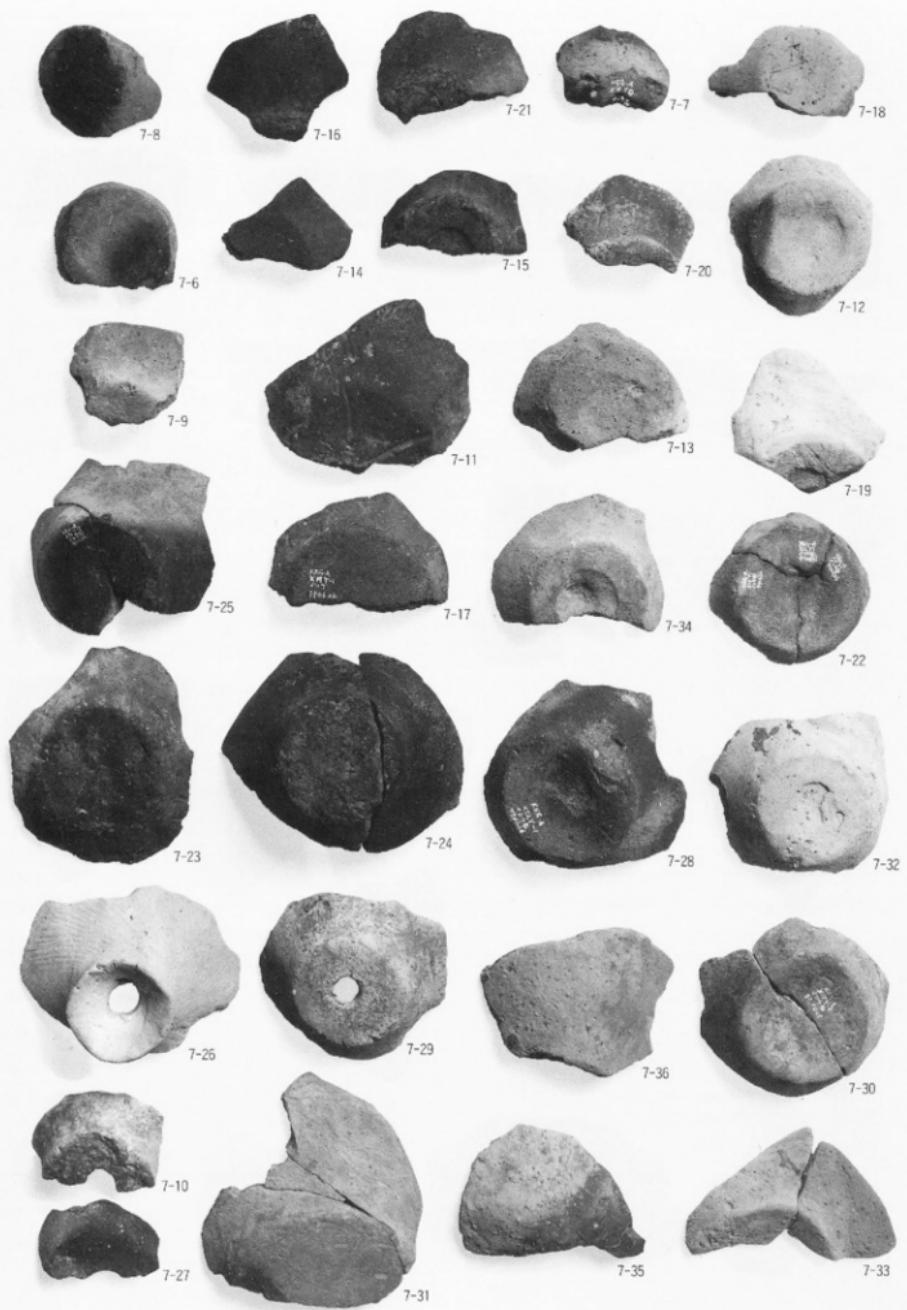
図版19 遺物写真 弥生土器・越中瀬戸 (図版4 参照)
(縮尺1/2)



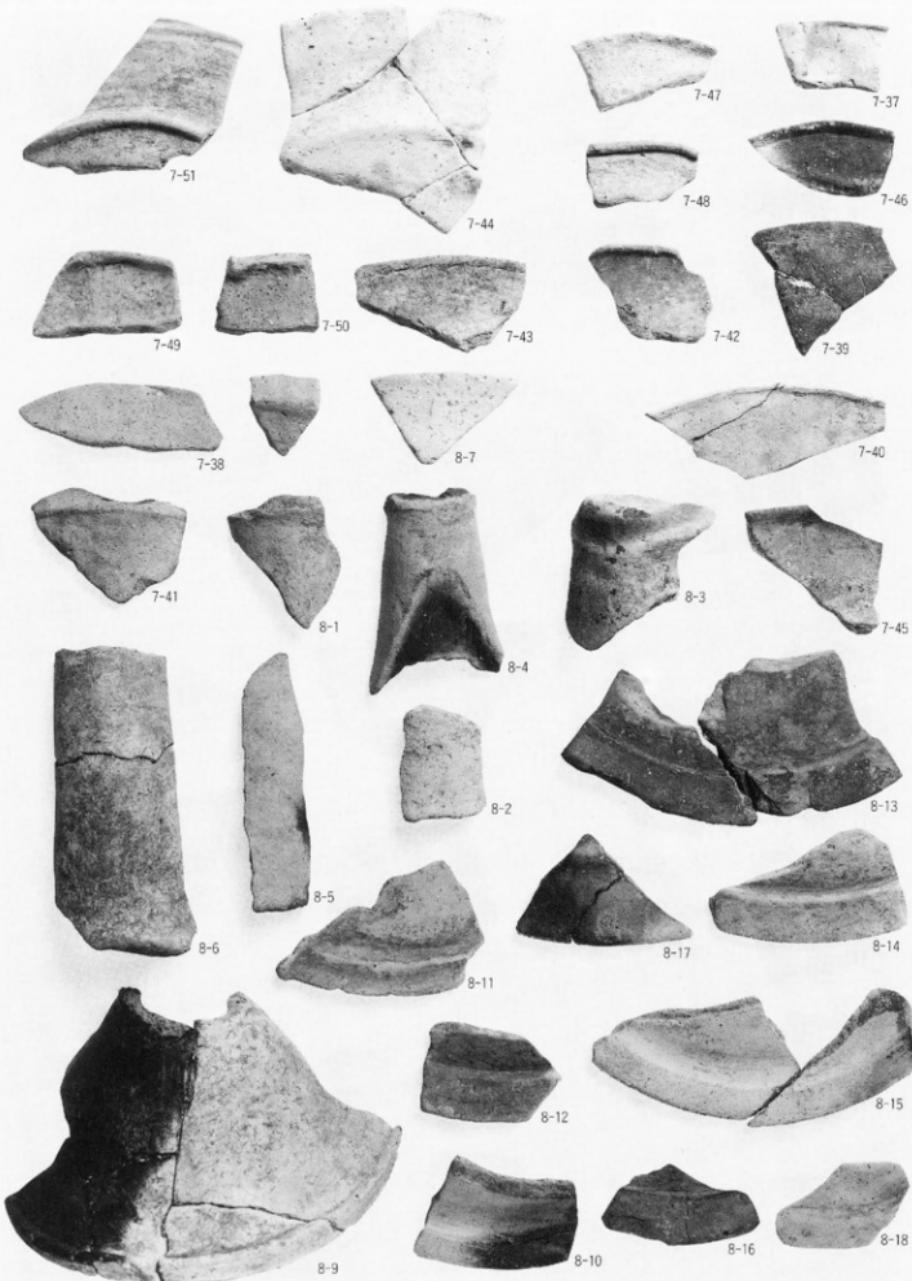
図版20 遺物写真 弥生土器 (国版5, 6 参照)
(縮尺1/2)



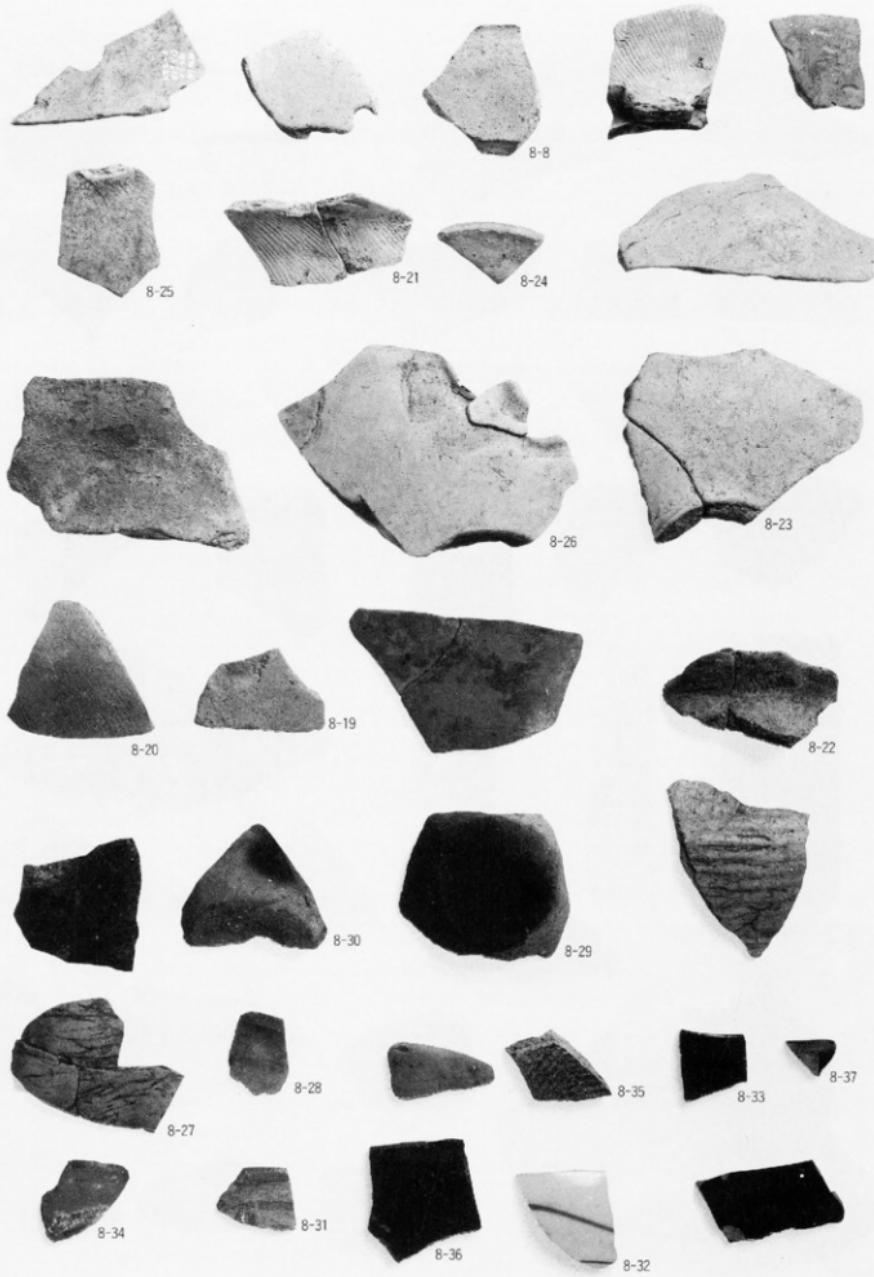
図版21 遺物写真 弥生土器 (図版6, 7参照)
(縮尺1/2)



図版22 遺物写真 弥生土器 (図版7参照)
(縮尺1/2)



図版23 遺物写真 弥生土器 (図版7, 8 参照)
(縮尺1/2)



図版24 遺物写真 弥生土器・土師器皿・珠洲焼・越中漬戸・伊万里

報告書抄録

ふりがな		とやまけん なかにいかわぐん かみいちまち えがみA					
書名	農村総合整備事業上市西部地区に伴う 富山県中新川郡上市町江上A遺跡発掘調査概報						
編著者名	上市町教育委員会						
編集機関	上市町教育委員会						
所在地	930-0353 富山県中新川郡上市町法音寺1番地						
発行年月日	1998年3月						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
江上A遺跡 上市町江上	016322 322003	36度42分45秒	137度20分40秒	19970601 19970731	680	農道改良に伴 う発掘調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
江上遺跡	散布地	弥生時代	土壙 2 溝列 5	弥生土器	調査区は、洪水など水害にあった部分があり、土器が押し流された様な状態で検出された。 調査区に住居跡は検出されなかったが近接する部分で検出される可能性が高い。		

平成9年度
県営農村総合整備上市西部地区に伴う

富山県上市町

江上A遺跡発掘調査概報

発行日 平成10年3月

編集・発行 上市町教育委員会

印刷者 株式会社チューエツ

